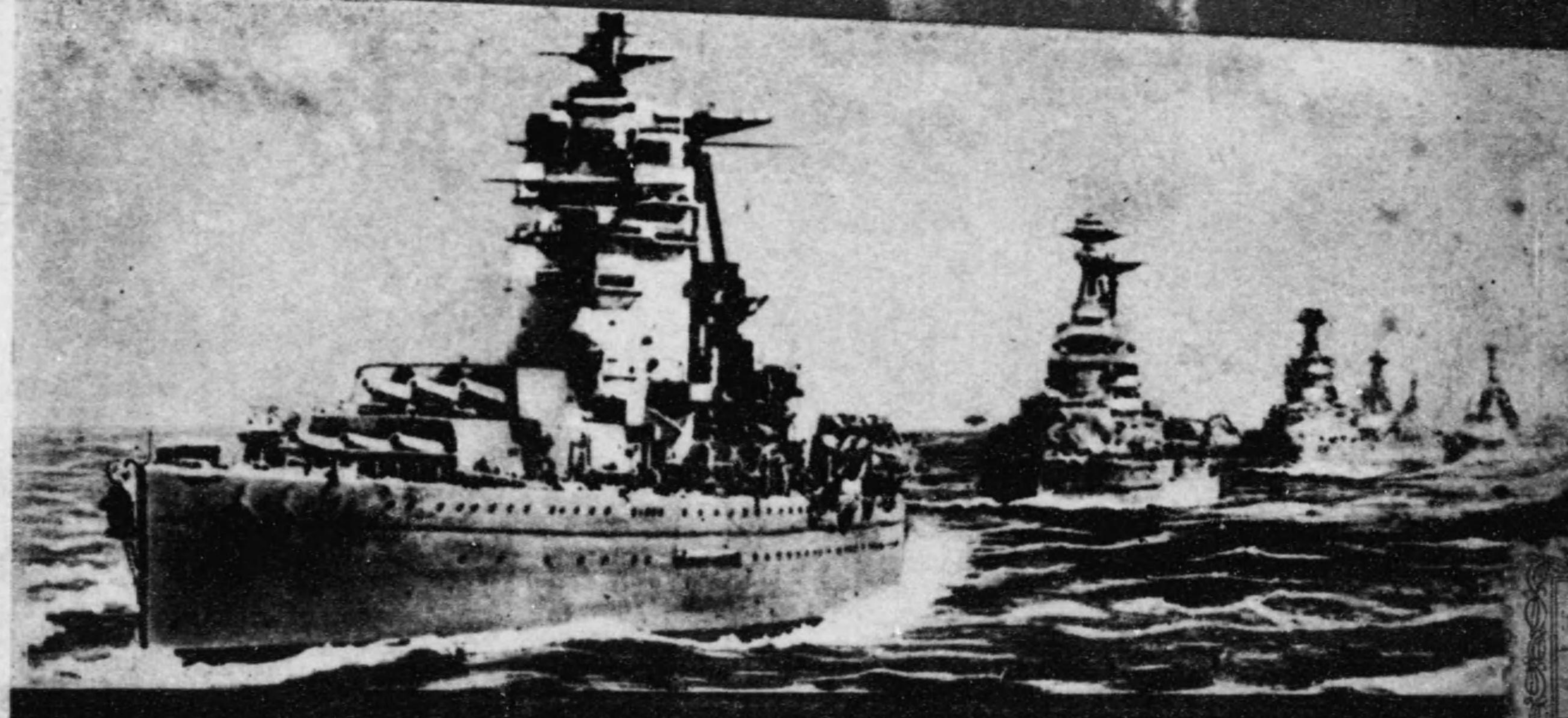


70 機危の年六三九

威脅の露

特242

237



25 銭

行發會養修と識知

1



* 0 0 0 9 9 2 3 0 0 0 *

0009923-000

特242-237

一九三六年の危機と米露の脅威

佐藤鉄城・著

知識と修養会

昭和8

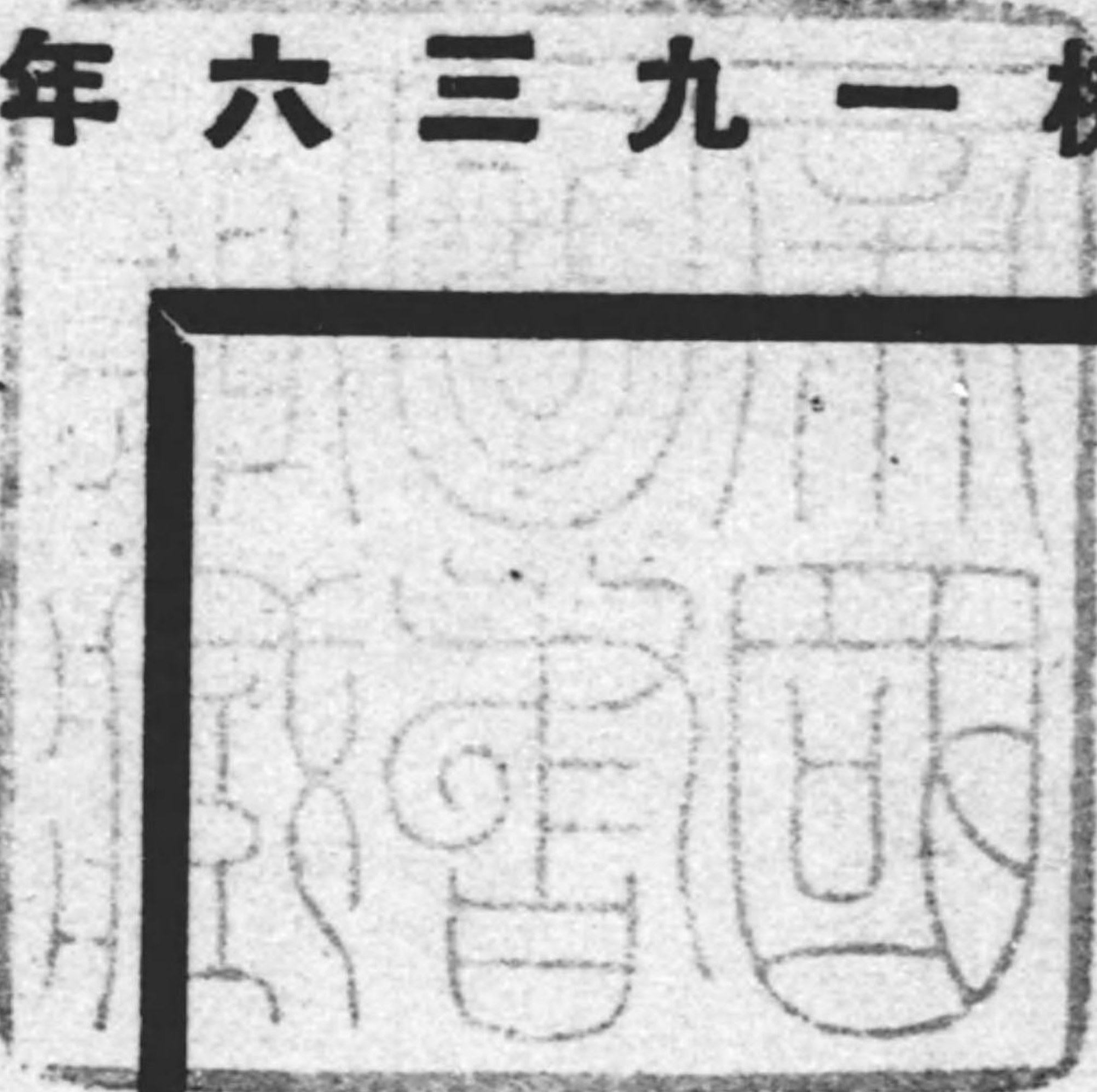
ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

特 242
237

と 年 六 三 九 一 機 危

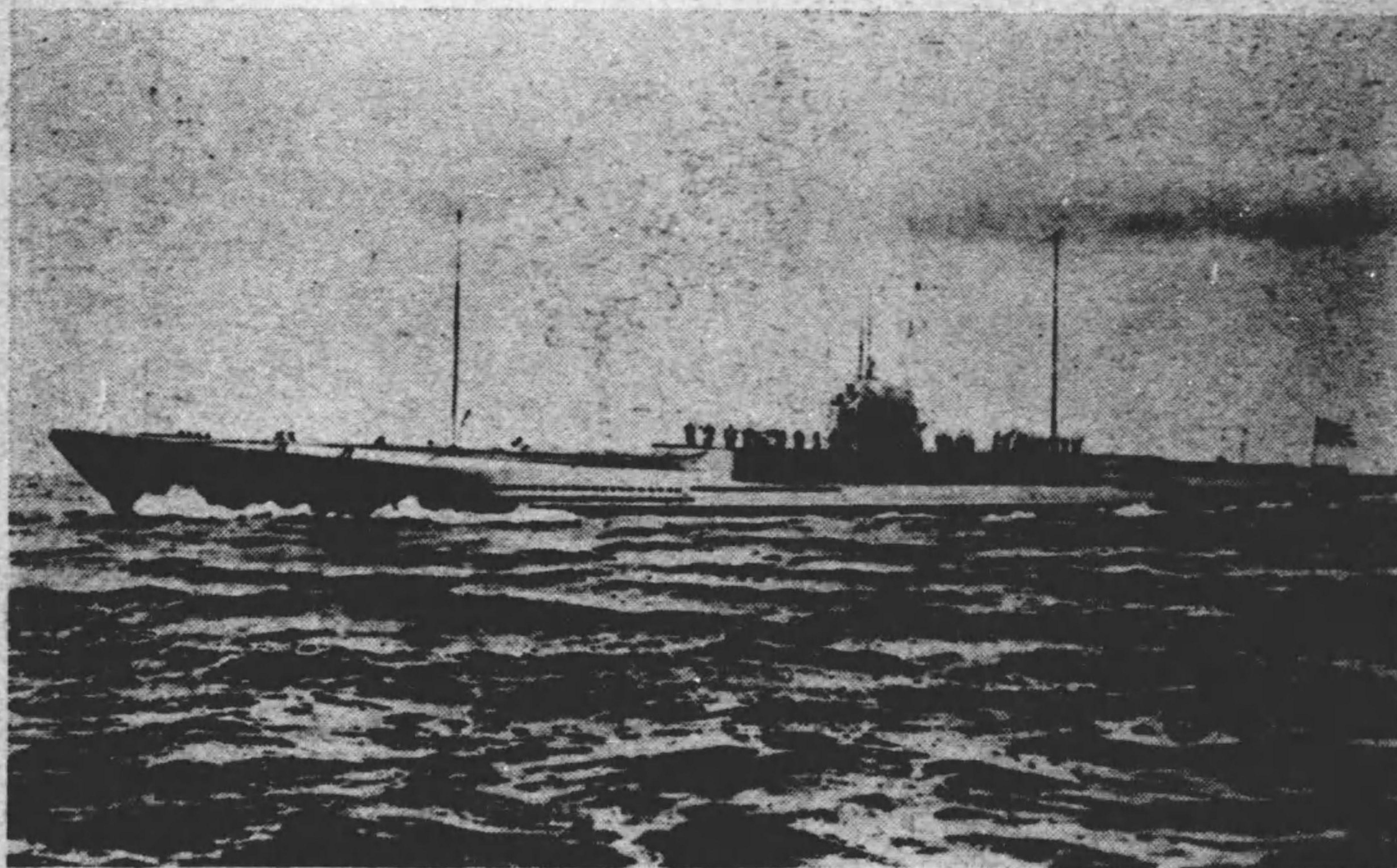
日
米
の
海
軍



佐藤鐵城著
知識と修養會發行



砲口はいづれを指す。我が艦隊の猛演習



米海軍の恐怖の種あでる我が伊級潜水艦

日米海軍目次

寫眞欄

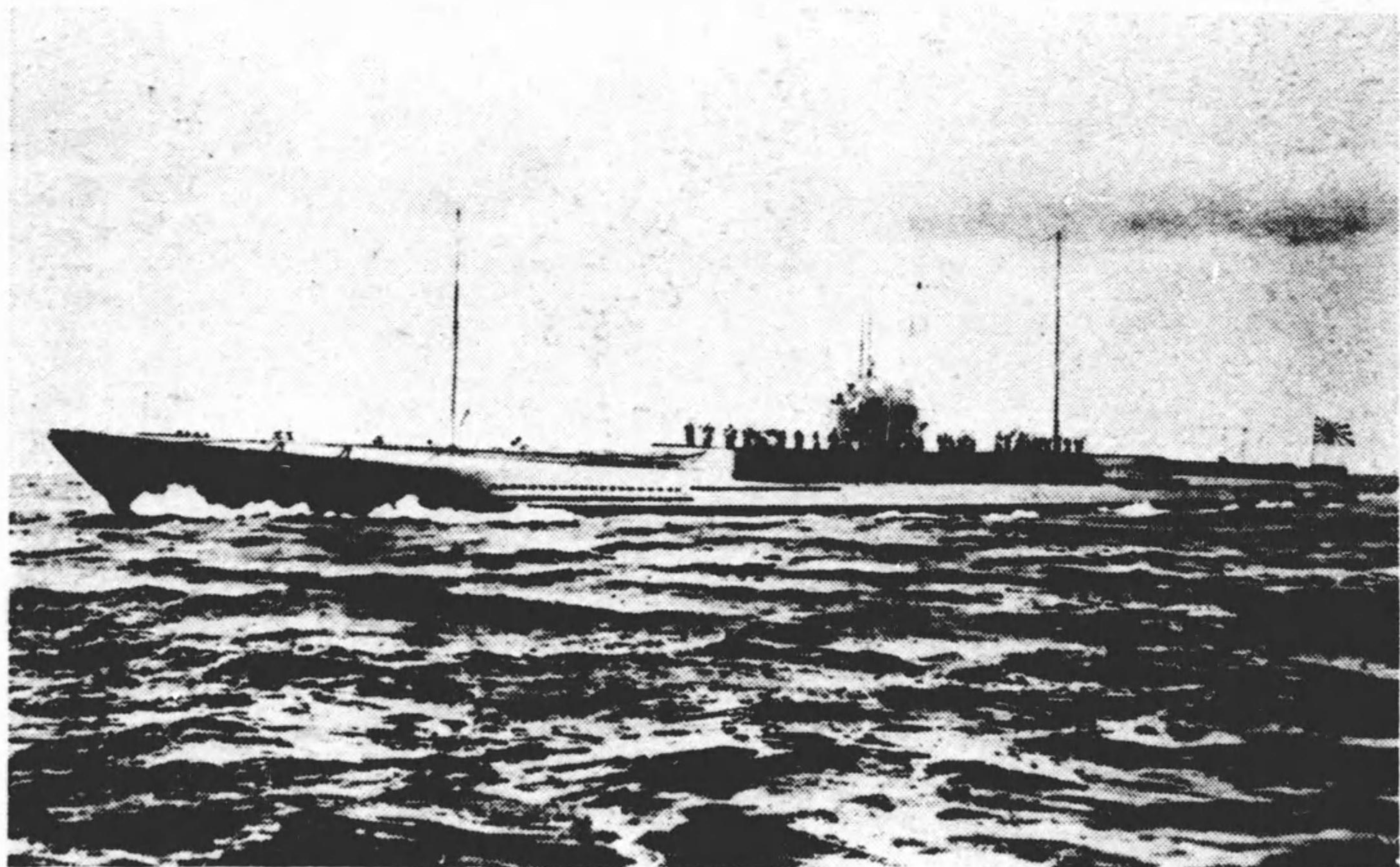
砲口はいづれを指す……………一
 日本の潜水艦……………二
 我が一萬噸巡洋艦摩耶……………三
 南洋群島の風光……………四
 米國マーチン急下降爆撃機……………五
 米國戦艦アクゾナ……………六
 米國潜水艦よりの飛行機の出発……………七

- ◇我國と太平洋……………一
- ◇ワシントン海軍軍縮會議……………二
- ◇ロンドン軍縮會議……………三
- ◇米國の建艦熱……………四
- ◇日本の第二次補充計劃……………五
- ◇米國の極東進出と米露提携……………六
- ◇海の生命線 南洋群島……………七
- ◇我が海軍の使命……………八
- ◇日米海軍力の比較……………九
- ◇日米若し戦はば……………一〇
- ◇太平洋要圖……………一一

四七 四三 三〇 二八 二五 二二 二一 一六 三一 一 四 三 三 二 一



砲口はいづれを指す 我艦隊の猛演習

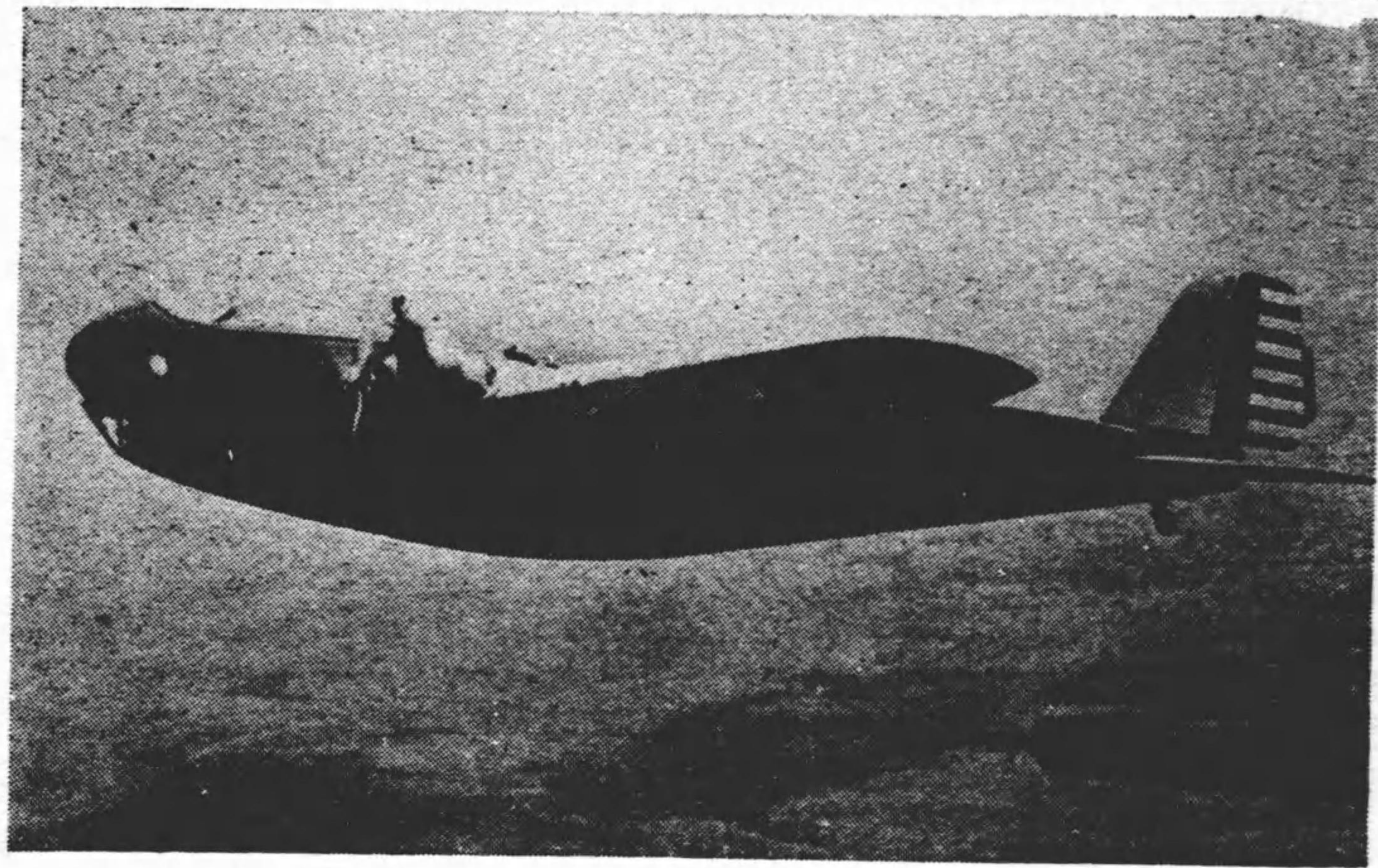


米海軍の恐怖の種あでる伊級潜水艦

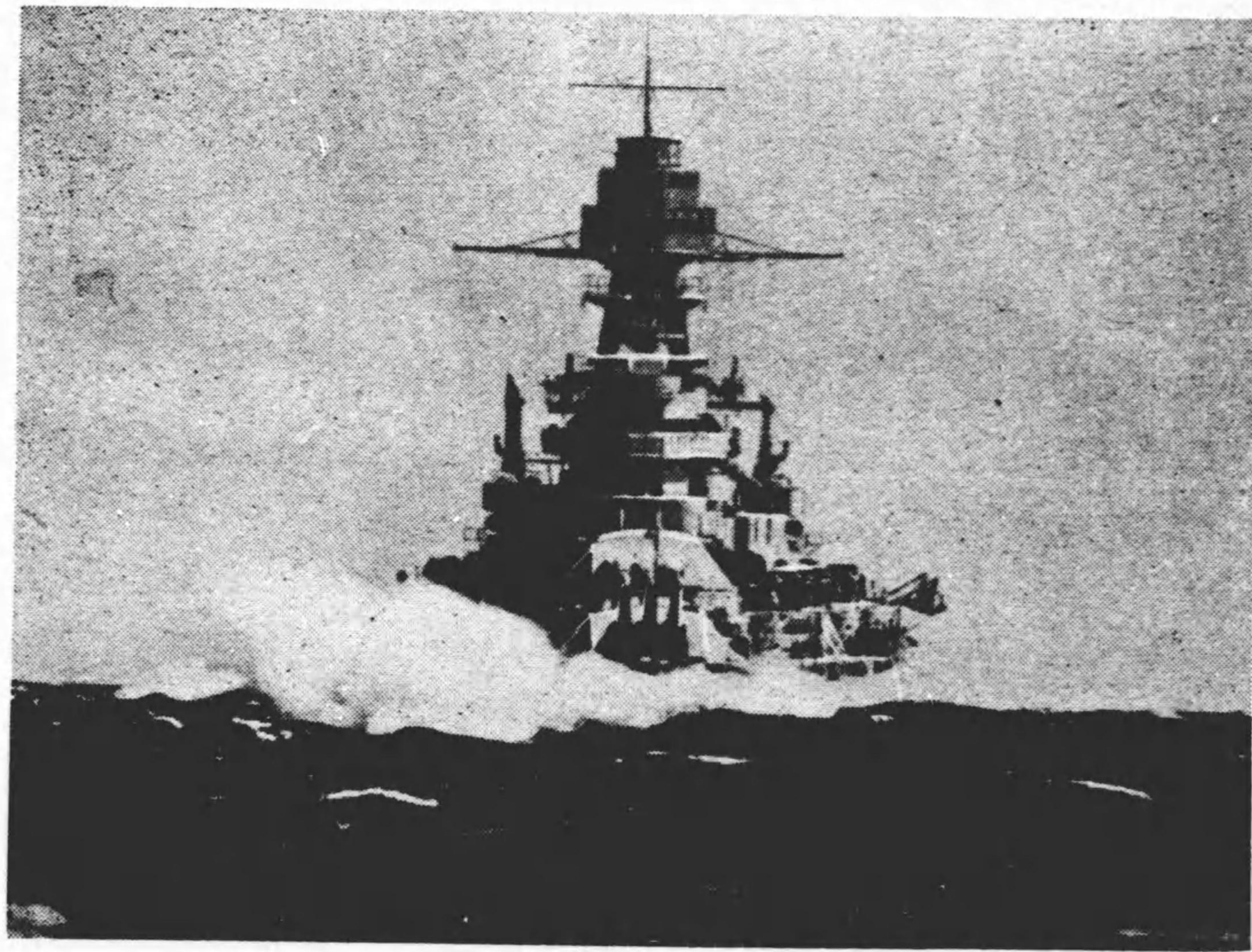
日米海軍目次

欄 眞 寫

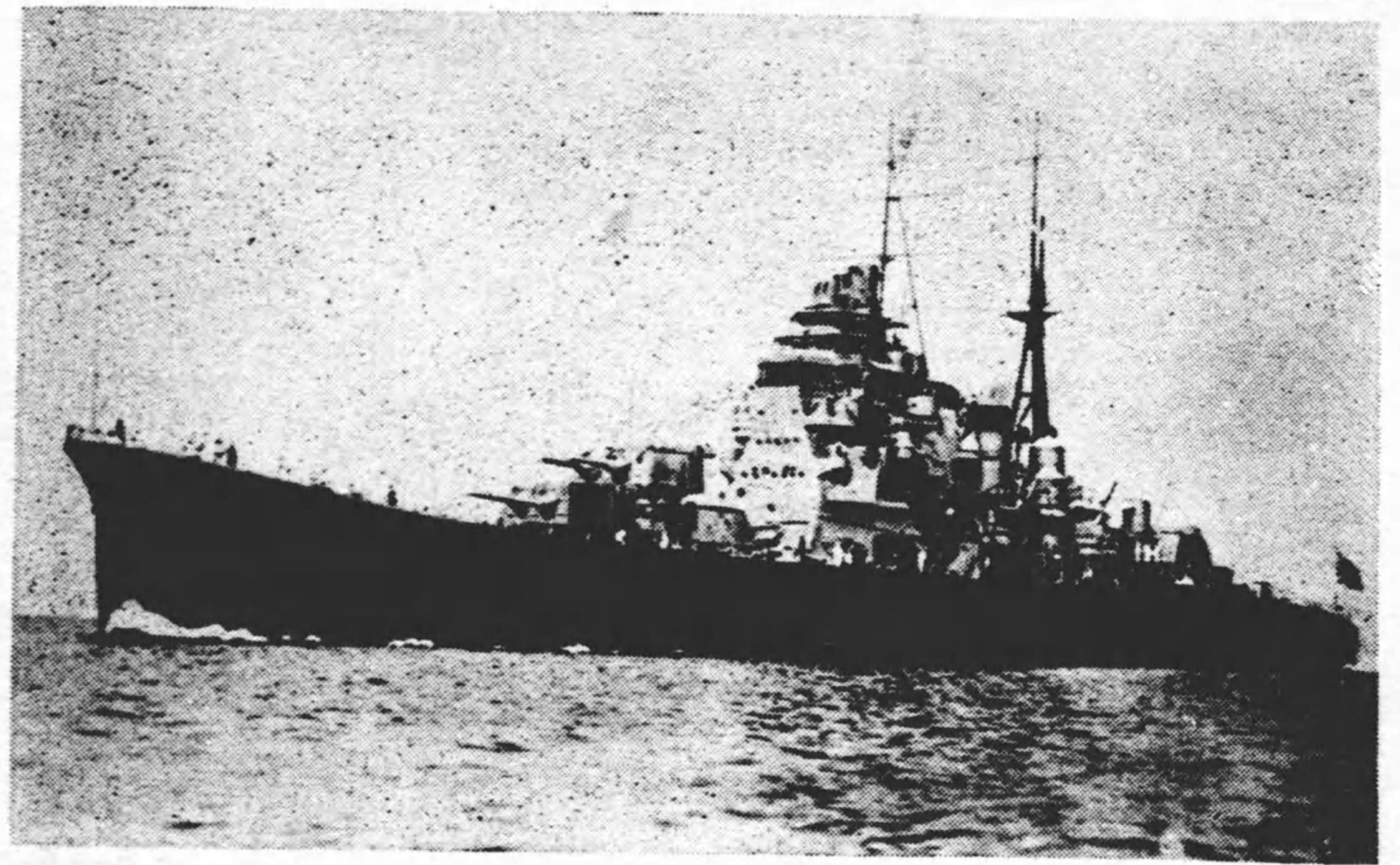
砲口はいづれを指す	一
日本の潜水艦	二
我が一萬噸巡洋艦摩耶	三
南洋群島の風光	四
米國マーチン急下降爆撃機	五
米國戦闘艦アクゾナ號	六
米國潜水艦よりの飛行機の出發	七
◇我國と太平洋	八
◇ワシントン海軍軍縮會議	九
◇ロンドン軍縮會議	一〇
◇米國の建艦熱	一一
◇日本の第二次補充計劃	一二
◇米國の極東進出と米露提携	一三
◇海の生命線 南洋群島	一四
◇我が海軍の使命	一五
◇日米海軍力の比較	一六
◇日米若し戦はゞ	一七
◇太平洋要圖	一八



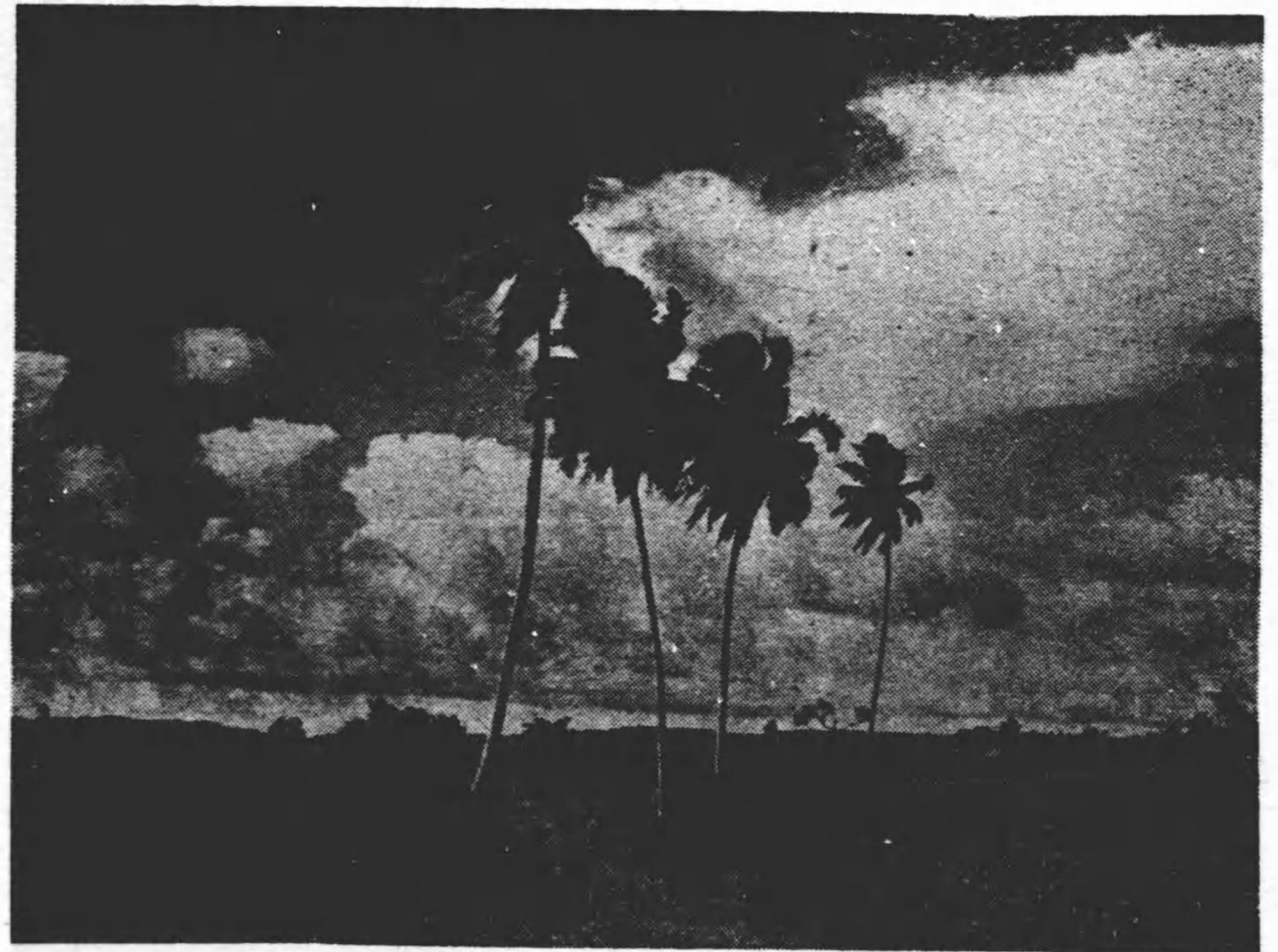
機撃爆降下急ンチーマの國米。物怪の空らがなさ



號ナゾリア艦戰國米の中進航闘戦



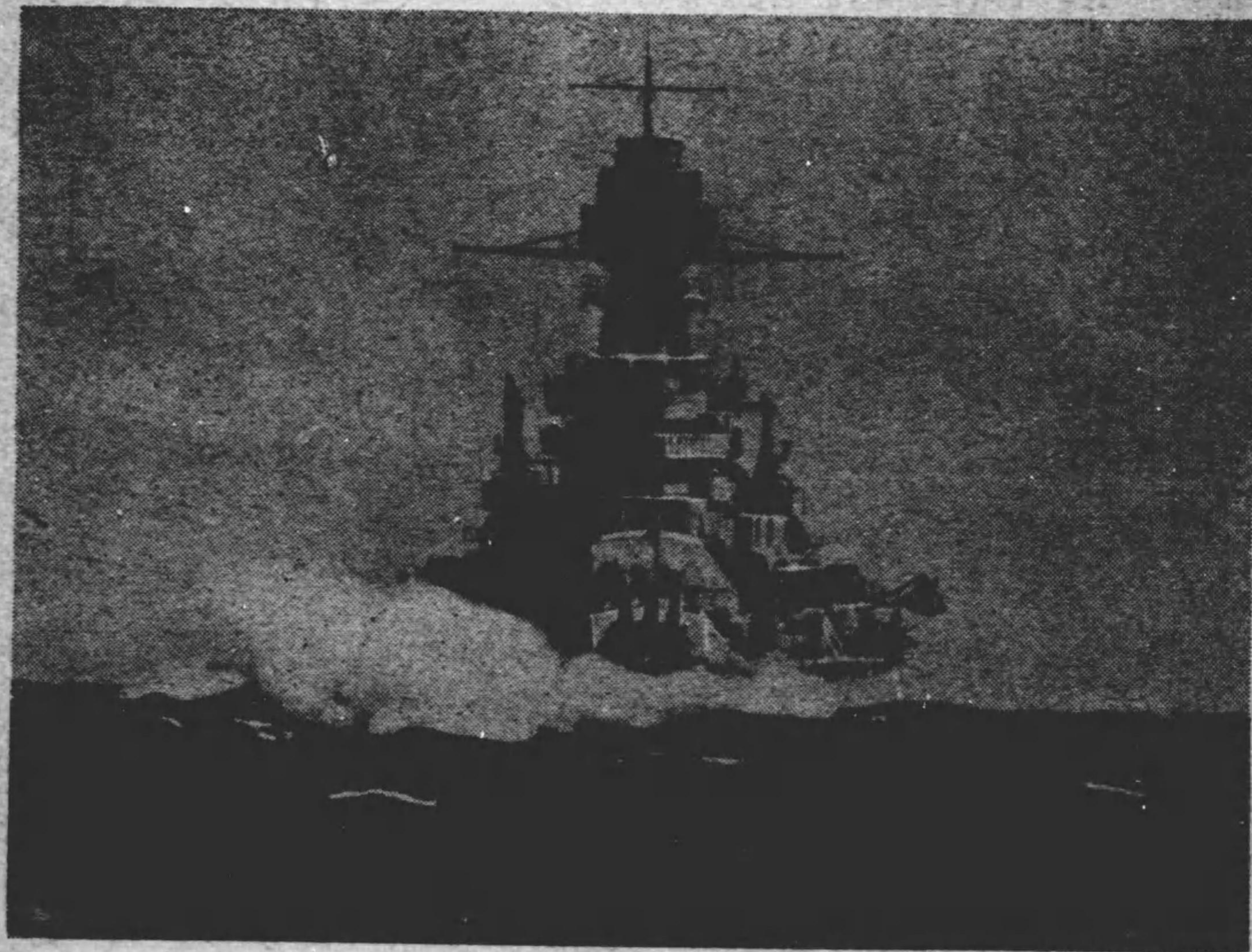
よ見をひ装き如の郭城の艦洋巡噸萬一級耶摩



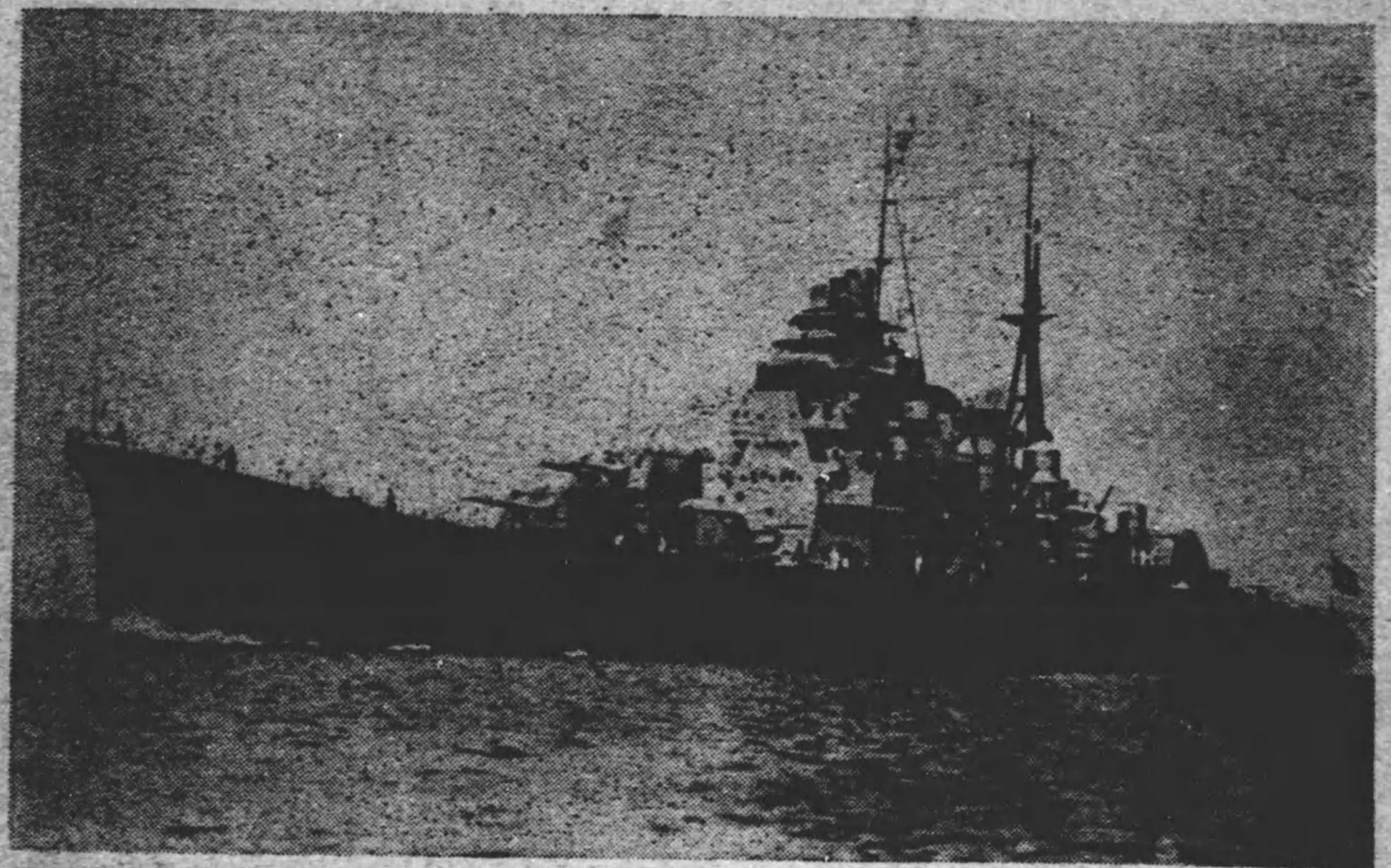
南光風の島群洋南がわ。る薫風海の里萬に葉の子椰
いなもでまふ云は事るあで線命生上海が我が島諸洋



機撃爆降下急ンチーマの國米。物怪の空らがなさ



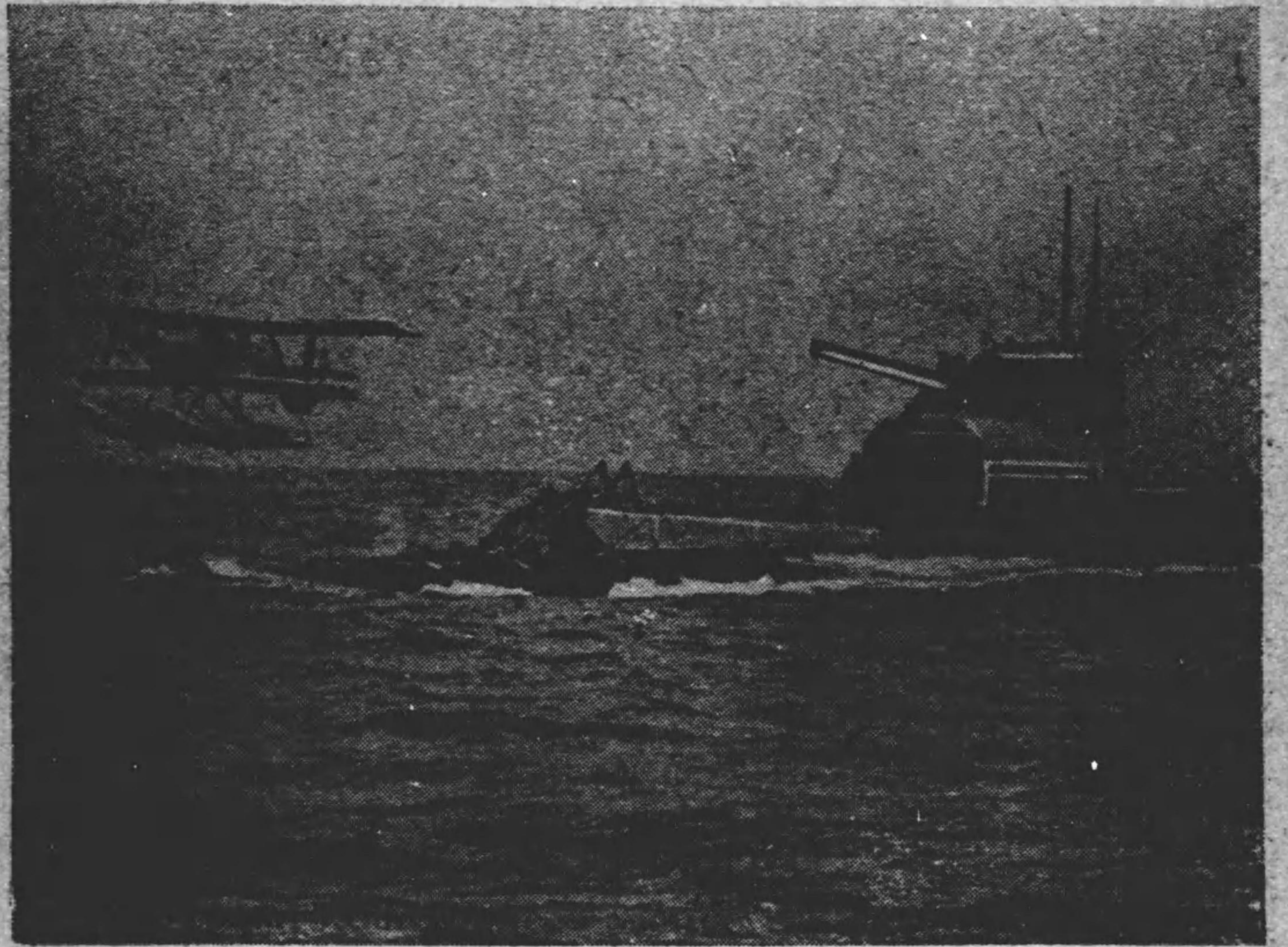
號ナゾリア艦戰國米の中進航闘戦



よ見をひ装き如の郭城の艦洋巡噸萬一級耶摩



南光風の島群洋南がわ。る薫風海の里萬に葉の子椰
いなもでまふ云は事るあで線命生上海が我が島諸洋



これは現へ海近本日がれこ。發出の機行飛りよ艦水潛國米
るあで事大一らた

一九三六年 の危機と日米の海軍

我が國と太平洋

亞細亞大陸の東岸、澎湖として太平洋の波濤寄するところ、點々として北端千島より北海道、本州、九州四國を経て琉球、臺灣に至る飛石の如き列島、これこそ我等が祖國、日本の姿である。丁度その形は亞細亞大陸に對する天然の防波堤として、太平洋の怒濤に對抗してゐるばかりでなく、實際的にも亞細亞大陸の守護神として、不當なる海よりの侵略者を監視してゐる。而して小笠原諸島を経て、遠く南方南洋諸島に至る、いはゆる海上生命線と丁の字なりに結んで西太平洋の守りはいよく固いのである。

太平洋時代來る。かうした聲が世界大戰後、頻りに擧げられ、列國の注視をひいてゐる折から、

その概略に當つて見ることは大いに意義深いことである。

太平洋の廣さは東西一萬哩、南北九千三百哩あつて大西洋の二倍に及ぶ、廣大な區域である。

これを繞る國としては、その西方には我が日本を始め、極東赤化の魔手を弛めぬソヴェートロシアがあり、我が友邦としての新興滿洲國があり、四億の人口を有して年中なんだかだと國內の騷亂が絶えぬ中華民國がある。

更に佛領印度支那があり、シヤムがあり、英領でその寶庫である印度及び海峽植民地があり、蘭領東印度諸島があり、米領フィリッピンがある。

南部には蘭領及び英領のパプア島、英領として羊毛を以て聞えたオーストラリアと我が海の生命線南洋群島及びサモア島(米領)マニヒキ諸島(英領)パウモツ諸島(佛領)等がある。

東方にはチリ、ペルー、エクアドル、コロンビヤ、ニカラガ、メキシコ、パナマ、及び米國、英領カナダの南北米中の諸國があり、中央太平洋上には米國の前衛根據地ともいふべきハワイ島及びミッドウエー島ウエーク島がある。

北部には米領のアラスカ及びアリューシャン列島とソ領のチヌクチ半島、カムチャツカ半島があ

る。

以上で太平洋の概略を述べたが、この中に強國として睨み合つてゐるのは、日、英、米の三國であり、佛ソ蘭の三國がこれに續いてゐるわけである。

特に日、英、米三國は世界の三大海軍國として、お互に牽制し合つてゐるのであるが、英國の太平洋上に於ける艦隊は小勢力であるので、何と云つても、日米の兩國海軍が太平洋の東西に横綱としての、威容を整へ對立してゐることになる。

ワシントン海軍軍縮會議

日米の海軍對立を語らんとするには、その根源とも云ふべきワシントン會議、ロンドン會議を見直すことが肝要である。ワシントン會議は一九二二年即ち大正十一年に、時の米國大統領の招請によつて、日、英、米、佛、伊、五ヶ國が参加して、ワシントンに開催せられたのである。

その目的とするところは世界大戰後の各國の無益な建艦競争を制限して、軍費の負擔を軽減せんとすることが第一の目的であつた。

當時英國は獨逸海軍の全滅により世界大戦中に使用した、多數艦船の整理に迫られて居り、米國は世界大戦中英國にとつて代つて、世界の經濟市場に君臨するに至つた好況の餘勢を驅つて、世界第一の海軍國を建設せんとしつゝあつた。

そればかりでなく戰艦のトン數の如きも、各國共四萬トン、五萬トンと云ふ大きなものと計畫し、主砲も次第に十六インチ砲から十八インチ砲と大きくなる傾向にあつた。

かくいふ我國に於ても、紀伊、尾張等の戰艦は四萬二千トンの設計であつた。

斯様の状態の中で、ワシントン會議は開催せられ、我國からは加藤友三郎大將、徳川家達公爵、幣原喜重郎大使等が出席して、對米七割を強硬に主張したが、それを貫徹する事が出来ず、結局西太平洋諸島に於ける要塞及び海軍根據地の現状維持、即ち將來の防備を制限する事を代償として、主力艦及び航空母艦の對米六割を承諾した。

その結果として主力艦即ち戰艦に於て、總排水量は、

日 本	三一五、〇〇〇噸	九 隻
米 國	五二五、〇〇〇噸	十五隻

英 國	五二五、〇〇〇噸	十五隻
佛 國	一七五、〇〇〇噸	隻數自由
伊 國	一五七、〇〇〇噸	隻數自由

となり、各艦共三五、〇〇〇噸を超ゆる事が出来なくなつた。又、代艦建造は昭和六年まで制限され、備砲は十六インチ即ち四十センチ六と制限された。又航空母艦その總排水量は、

日 本	八一、〇〇〇噸
米 國	一三五、〇〇〇噸
英 國	一三五、〇〇〇噸
佛 國	六〇、〇〇〇噸
伊 國	六〇、〇〇〇噸

となり各艦共二七、〇〇〇噸を制限とし、その制限噸數内で建造する事が出来ることとなり、備砲は八インチ制限となつた。當時米國の航空母艦サラトガ、レキシントンは三萬三千トンであつたが、

特別に認められることになった。

又補助艦は一萬噸以下で備砲も八インチ以内と定めた。以上がワシントン會議によつて五、五、三の比率が出来た経過である。

ロンドン海軍軍縮會議

ワシントン會議後、その制限を受けなかつた巡洋艦、驅逐艦、潜水艇等の建造競争が再燃し來つたので、一九二九年即ち昭和四年ロンドン海軍軍縮會議が英國の首相マクドナルド氏によつて招請せられ、我國からは若槻禮次郎氏、財部海軍大將、松平駐英大使等が全權として出席した。集つたのは日、米、佛、伊の諸國の代表であつた。而して我全權は補助艦總括七割、大型巡洋艦對米七割潜水艇現存量保有といふ、主張を以て望んだのである。

結局主力艦航空母艦については代艦建造延期、一萬噸以下の航空母艦も航空母艦制限噸數の中に含まれることなどが、ワシントン會議の補ひに決められただけであつたが、本會議の主題である補助艦については次のやうな協定が成立した。

甲級巡洋艦

日本	一〇八、四〇〇噸	十二隻
米國	一八〇、〇〇〇噸	十八隻
英國	一四六、八〇〇噸	十五隻

乙級巡洋艦 (隻數制限なし)

日本	一〇五、五〇〇噸
米國	一五〇、〇〇〇噸
英國	一五〇、〇〇〇噸

日本	五二、七〇〇噸
米國	五二、七〇〇噸
英國	五二、七〇〇噸

又潜水艦に於ては

となり、各艦種共備砲にそれぞれ制限が加へられた。この補助艦の制限に於て佛伊兩國間に於ては

議論が多く、結局協定は不成立に終つて、事實上は日、英、米の軍縮會議となつた。

而してワシントン、ロンドン條約を通じて有効期限は一九三六年即ち昭和十一年十二月三十一日
限とし、一九三五年(昭和十年)には又改めて海軍會議を開催する事を約した。この會議に於て結局
我國は巡洋艦對米六割、驅逐艦對米七割、潛航艇同率、補助艦總括對米六・九割となつたのである。

このロンドン會議の結果については、これを以て我全權の精一杯の努力でやむを得ない認めるとも
のと、全く我が國防を無視したものであるといふ非難の聲とがあつて、五・一五事件などの原因とも
なつたが、海軍部内の大多數の意向はこれを不満として、對策が講ぜられた。即ち當時の條約制限
内で第一次の補充計畫を遂行し、條約制限に相當の餘地を有する米國海軍の現有勢力に對し(米國
は當時の保有力で立派に米國の海岸を防禦し得る實力を有してゐた)幾分でも分をよくして、せめ
て日本の防禦に事を缺かぬやう努力する事になつた。これは國防上當然の事であつたのである。然
るに米國側に於ては、ひとり日本のみが建艦熱を擧げてゐるものやうに言ひふらした。即ち、
「我が米國はロンドン會議以後、何等建艦をしないのに日本ばかりが建艦をしてゐる」

との非難を浴せたのであるが、事實は然らず、米國に於てもロンドン會議以後多數完成し、又現に
建艦しつゝあるのである。今その艦船を示すと次の通りである。

艦種	隻數	名	備考
主力艦	二隻	ペンシルヴェニア及びアリゾナ	各艦七百五十萬弗で改装(一九三一年三月完成)した
〃	三隻	メキシコ、アイダホ及ニュー・メキシコ	各艦約一千萬弗で改装中であるが一九三四年迄に完成する筈
大巡洋艦	三隻	ペンサコラ、ノーザンプトン及ヒューストン	一九三〇年完成
〃	四隻	シカゴ、チエスタ、オーガスタ及ルイスヴィル	一九三一年完成
〃	二隻	ポーランド及インデアナ・ポリス	一九三二年完成
〃	三隻	ニュー・オルリアンヌ、アストリア及ミネア・ポリス	一九三四年迄に完成の豫定
〃	二隻	タスカルーサ及サンフランシスコ	一九三四年完成の豫定

航空母艦	一隻	レンジアー	一九三四年完成の豫定
艦隊潜水艦	二隻	V-15及V-16	一九三〇年完成
"	一隻	V-17	一九三二年完成
"	一隻	V-18	一九三三年完成の豫定
"	一隻	V-19	一九三四年完成の豫定
驅逐艦	五隻	フアラガット、デューウエー、ハル、マグトナウ及ウォルデン	一九三四年完成の豫定
"	三隻	三五三、三五四及三五五	一九三五年完成の豫定

即ち米國は過去の三箇年間に主力艦二隻の改装を完了し、大巡洋艦九隻、艦隊潜水艦三隻を竣工就役させ目下大巡洋艦五隻、航空母艦一隻、艦隊潜水艦二隻、及驅逐艦八隻を建造して居る許りでなく、主力艦三隻をも改装中である。實に大規模の造艦といふべきである。

米國の建艦熱

而して昭和八年春ルーズベルト新大統領が、就任するや、失業救済の名の下に猛烈な勢いで建艦熱を煽り、矢つぎ早に擴張計畫を發表した。今これを軍事普及部の冊子に見るとさつと次の通りである。

二月十一日 大海軍論者として有名なクロード・エー・スワンソン氏（民主黨上院議員）がルーズヴェルト新内閣の海軍卿に就任することとなつた。

三月三日 一九三三、三四年海軍豫算（三億九百五十萬弗）が大統領の承認を受けた。

十一月 新飛行船メーコン完成進空式を行つた。これは太平洋横断は樂に出来るすばらしいもので、しかも航空中數隻の飛行機を腹の中から飛ばすことが出来る。

十七日 海軍卿スワンソン氏は重ねて新聞記者に對し條約限度迄建造する事の必要を力説した。

四月 海軍作戦部長ブラット大將は海軍學會誌四月號に「忘るゝ勿れ」と題する論文を寄せ、軍縮の必要な所以と其の經過から説き起しフーザー案を賞揚し、暗に日本の新提案を攻撃し

リットン報告を引用して「日支紛争に關する日本の態度は時代錯誤である」と非難し「軍縮が成
立しなければ建艦競争も取て辭する處に非ず」と述べ米國の國民性を禮讚し、世界戦争参加の
實例に徴して國內輿論統一の容易である事を説き、大戦前の英獨海軍交渉問題を例示して「日
米間事端發生の有無は日本今後の軍縮竝に日支紛争に對する態度で決まる」と結論した。

四 日 (一) 下院海軍委員長ヴィンソン氏は大統領と會談後、「近く議會に提出される失業救
濟案中には二億三千万弗を投じて向ふ三箇年間に、

六吋砲巡洋艦	四隻
航空母艦	二隻
驅逐艦	二十隻
潜水艦	四隻
計	三十隻

を建造しようとする法案を含ませることになつた」と發表した。

(二) 飛行船アクロン爆破。これはメーコン號の姉妹船であつた。

五月一日 大統領は一九三三、四年度海軍豫算から五千五百万弗の節約を命じたが、五日になつ
て三千九百五十万弗を節約することに決つた。

七日 海軍卿スワンソン氏は對日海軍問題に關して左の聲明を發表した。

「若し日本が日英米海軍力の均等などを主張するようなことがあれば米國は、絶対に賛意を
表する譯には行かぬ。倫敦條約で規定された六、六、四の比率は公正妥當なもので此の比率
は絶対に遵守されねばならぬ、若し日英兩國が米國と共に世界の海軍力を縮少することを欲
しない場合は米國は倫敦條約の許す範圍内で、海軍力の最大擴張を續行しようとする者で
ある。尙又日本が依然として、海軍を備の縮少を今日以上讓歩しない場合は、米國は倫敦條
約で許された全勢力を保持する爲、更に航空母艦二隻、八吋砲巡洋艦四隻、六吋砲巡洋
艦七隻、驅逐艦九十隻、潜水艦十八隻を建造する必要がある。

二十三日 海軍卿スワンソン氏は新建艦案に關し左の聲明を發して。

「米國海軍は漸次老朽状態に陥りつゝある。若し米國海軍が世界第一位を維持しなければ抑
々海軍を維持することが全く徒爾に終るであらう。一旦緩急ある場合米國の權益を擁護する

爲には世界第一位の海軍力を必要とするのである。余の所謂建艦案は六吋砲巡洋艦四隻、航空母艦二隻、驅逐艦二十隻、潜水艦四隻、砲艦二隻、計三十二隻を含んで居る」云々。

六月十日 飛行船アクロン爆破事件の上下兩院調査委員會は其の再建を勸告した。

十四日 大統領は新建艦法に署名した。

十六日 大統領の決裁を経て公共事業費から新艦搭載飛行機購入費千五百萬弗を支出することになった。

二十九日 海軍卿スワンソン氏の名を以て新海軍政策を發表した。

三十日 海軍省は一九三三—三四年度の艦船運用計畫を發表したが之に依ると米國海軍は本年

七月一日から來年六月三十日迄の一年間左の大海軍力を太平洋中心に配備運用する豫定である。

隻	數	二九九隻
將	兵	五四、一五〇人
飛行機		四九一機

七月五日 海軍卿スワンソン氏は主力艦其の他近代化及根據地施設改良の爲、約一億弗の支出方を要求した。

六日 米國合同通信社取締役會長ロイ・ハワード氏今後の對日政策として「一面親善一面建艦」を主張した。

右のロイ・ハワード氏の此の聲明は、米國の建艦熱に對して火に油を注いだ感があり、ハワード系新聞は盛に對日軍備充實の必要を叫び、就中七日のワールド・テレグラムの如きは東洋平和維持の爲に建艦を行へとさへ極言するに至つた。

十日 海軍卿スワンソン氏は「余は平和主義者で多年世界の軍縮に努力して來たが列國が米國の主張に聽従しなかつた結果米國も亦條約限度迄建艦を行ふことに決意した」と聲明した。

十二日 海軍卿スワンソン氏財務省より經費を受領せば、直に眞珠港及パナマ兩作戰根據地の施設改良に着手すべき旨聲明し、更に日本が條約限度迄建艦しても之に介意しない旨をも聲明した。

十六日 艦隊の三分の一豫備制を止め従前通定員七萬九千七百人を維持する爲、豫算六百萬弗

を復活した。

三十日 海軍卿スワンソン氏は現在の在役兵員數七萬九千人を九萬人に増加しようとする法案を議會に提出することになつたと云ふ説がある。

八月一日 大統領は二日夜、民間造船所で二十一隻、海軍造船所で十六隻計三十七隻（新計畫のもの三十二隻舊計畫のもの五隻を）起工する件を裁可したので海軍卿は三日各造船所との契約に調印した。

即ち米國では公共事業費で三十二隻一九三四年度豫算で五隻合計三十七隻の新艦建造に着手したことが明瞭である。

流石に英國もこの猛烈な米國の建艦ぶりに驚いて、米國政府に糺すところがあつたが、「條約の制限内で造るのは當方の勝手で他からとやかく云はれる筋はない。」と劍もほろゝの御挨拶であつた。

これは日本からも聞きたいことで米國としては現有勢力で立派に自國を防禦することが出来るのに、何のために大擴張するかと云ふ疑ひが起るのである。

そこへゆくと日本の方はどうしても現有海軍力では、自國を防禦するだけに十分でないから、増加しやうと云ふのであつて、こつちから太平洋をおし渡つて米國の海岸を襲撃しやうなどといふ野心はさらさらないのである。

日本の第二次補充計畫

この立場から、今回閣議の賛成を漸く得て、發表されたのが第二次海軍補充計畫である。日本としては不況の折柄、昭和九年からいはゆる一九三六年の危機ある昭和十二年にかけて、四ヶ年に使ふ四億三千二百萬圓は可なりの巨額で血の出るやうな金であるが、現在の國家非常時に於て眞にやむにやまれぬもので來るべき日の慘禍を豫防する意味で、國民も堪え忍ばねばならぬのである。

以上の如く海軍第二次補充計畫は總額四億三千二百萬圓の豫算をもつて昭和九年度から十二年度にわたる四ヶ年繼續事業として實施することとなり、これにより乙級巡洋艦（八千五百トン級）二隻、航空母艦（一萬トン級）二隻、驅逐艦（千四百トン級）十四隻、潜水艦（千八百トン級）四隻の外に制限外艦艇二十數隻を建造することとなつたが、右計畫が完成する一九三六年末における日

米海軍の勢力關係は海軍當局の調査によれば左の如くである。

▲主力艦

隻數 總トン數

日本 九隻 二七二、〇七〇

米國 一五隻 四五五、四〇〇

▲補助艦

一、航空母艦

日本 五隻 七八、四二〇

米國 六隻 一三二、三〇〇

二、甲級巡洋艦

日本 一二隻 一〇七、八〇〇

米國 一六 一五二、六五〇
 (この外に米國は建造中のもので二隻あり)

比率 〇・七一

三、乙級巡洋艦

日本 一七隻 九八、七九五

米國 一四隻 一一〇、五〇〇

比率 〇・八九

四、驅逐艦

日本 七六隻 一〇五、一三一

米國 一一六隻 一四九、四〇〇

比率 〇・七〇

五、潜水艦

日本 三五隻 五二、五五三

米 國 四八隻 五二、〇二〇

比率 一〇〇

▲補助合計

日 本 一四五隻 四四二、六九九

米 國 二〇〇隻 一九五、八七〇

比率 〇・七四

▲制限内保有量總計

日 本 一五四隻 七一四、七六九

米 國 二二隻 一、〇五一、二七〇

比率 〇六、八

(備考) 一、本表は完成艦船をもつて算出したものである。

二、米國は産業復興費による三ヶ年製艦計畫(制限内三〇隻)を含むが、今後の計畫は算入してゐない。

三、日本は第一次補充計畫および目下計畫中の第二次補充計畫案を含む。

四、代換および廢棄は條約規定による。

五、米國はB級巡洋艦保有量の條約量に對する不足は、驅逐艦より融通し得るので驅逐艦の實際保有可能量は、上記のものに融通量一萬五千トンを加へた、約十六萬四千四百トンとなるので驅逐艦比率〇・六四補助艦比率〇・七二合計〇・六七となる。

斯くの如く一九三六年の、終りに於ても依然として劣勢の比率は祟つてゐるのである。最近米大統領は太平洋岸に集中してゐる大西洋艦隊を、一九三四年には大西洋へ歸還せしむる旨を發表し、我國の刺戟を避けるやうな聲明をしたが、これは我國の輿論を牽制する策と見られないものでもない。若しもこの手に乗つて、軍備の充實を怠るやうなことがあつたら、それこそ大事である。何となれば彼の艦隊は、いざと云ふ場合數日にしてパナマ運河により、太平洋岸へ出動し得るからである。

米國の極東進出と米露提携

人口一億二千萬人、しかも國富實に八千億圓を擁し、國內にあらゆる天然資源の寶庫を有して、世界大戰後、英國にとつて代り、世界最大の富有國となつたのは米國である。

その米國がどうして、支那大陸への進出を大なる目的としてゐるのであらうか。

もともと米國は大西洋岸から發展した國民で、西へ西へと領土を弘め、つひに太平洋岸へ進出し、一八六七年には千四百四十萬圓でアラスカとアリユウシヤン群島を露國が買ひ取つた。

米國の傳統的西進策はその海軍によつてやがて太平洋を越え極東に至り、一八五三年にはペリーが我國にやつて來た。この時ペリーは我が琉球と小笠原島を武力で奪取するつもりで大統領の承諾を得てやつて來たが、幸ひこれはその米大統領が更迭となつたので、政策が變り沙汰やみとなつた、しかしすんでのところ、奪はれてしまふところであつた。

現在の琉球、小笠原島が米國の手に落ちてゐたとしたら、如何であつたらう。これは考へて見るだけでゾツとするではないか。こんな所も有難い神靈のお護りがあつたのである。

一八六〇年代には太平洋上のハワイ諸島、ミッドウエイ島を手に入れ、一八九八年には米西戦争によつて、スペインからフィリピン島とグアム島を得た。これが米國の東洋連出の歴史のあらま

いである。

しかしてこれ等の諸島を足場にして、亞細亞大陸へ働きかけて來たのであつて、特に人口四億を有する支那大陸は、彼等の商品市場として、垂涎おく能はざるものなのである。

米國の事業界の状態は世界大戰前までは國內市場に重きを置いた。大戰中は自國も中途からの参戰國ではあつたが、血みどろな戦争を續けてゐる歐洲諸國への物資の供給を一手に引受けて、その繁榮ぶりは素張らしく一九一九年（大正八年）の世界大戰終末の年に於ても實に輸出超過額は實に八十億圓に上つたのである。

従つて工業國として異常な發展をとげたが、大戰後歐洲各國の工業界の復興と、加ふるに戦後の疲弊による、購買力の減退により、得た自國の不況化に伴ふて、大量生産品の捌け口がなくなつたので、この販路を非工業國である支那大陸に目をつけたのである。米國自身としては黄色民族の移民を完全に制限して、亞細亞民族に人種的侮蔑を與へてゐるに拘らず、彼等は口を開けば亞細亞の門戸開放、機會均等と叫んでゐるのである。これを要するに開戸開放、機會均等と云ひ條、要するに商品の賣込み口を開け、儲け仕事に割り込ませるといふ主義なのである。その御自身に於ては

キューバ、パナマ、ハイチ、ニカラガ等の中南米諸國に壓迫的政策をとつて居り、最近この方面の日本商品の進出に對しても抑壓せんとしつゝあることは注目すべき事である。

過ぐる滿洲事變中、時のフーバー大統領の下でスチムソン長官が幾度となく、いやがらせの聲明をしたのもつまるところ、滿洲國の儲け口を日本が、獨り占めに、してしまふとも思つたからである。(かかつて米國は我が南滿洲鐵道を買ひ取らうとしたことがあつたが、幸ひ小村侯の先見の明によつて實現させなかつた。)そればかりでなく上海事變が起ると、支那の長江筋の市場まで日本が武力で奪取すると思つて、表面は支那が可哀想だから救つてやるといふ名目の下にその全海軍を擧げて日本と一戦すべく、海軍の御大ブラット提督に打合せたのであるが、

「今やつても勝味がないから、もう少しお待ちなさい」

とたしなめられて、振り上げた拳骨の引込みがつかないやうな羽目に陥つたのである。

以上のやうに米國が支那への經濟的進出をする上に於ては日本が目の上にたんとく同様邪魔で邪魔で仕方がないのである。

一體支那は滿洲事件で、日本に何だかんだと、抵抗するが、日本なかりせば、とうの昔に米國か

英國が、それともソヴェートロシアの屬國見たやうに、なつてゐたであらうとは公平な第三者の見るところである。今度の米露復交の如きも、北鐵問題でソ國が急に強腰になつた點といひ、どうしても米露の間に日本牽制の黙約があつて、日滿兩國をして困らせやうとする肚のあることは否めない。我々は米露の今後の行動には深い注視が肝要である。米國が十何年も大規模な太平洋の渡洋作戦専門の海軍大演習ばかりやつてゐるのも、つまるところは支那への野心があるからであつて、折があつたら邪魔物日本をたゞいてやらうとする心の現はれと見るべきであらう。

海の生命線、南洋群島

滿洲國が我が國にとつて、大陸の生命線であるが如く小笠原島や硫黄列島を経て、南洋群島に達する線は海上の生命線となつてゐる。

南洋群島は過ぐる世界大戰中、我が國も聯合國側の一員として参戦した際、我海軍によつて一部占領された、舊獨逸領諸島であつて、赤道以北の東西二千七百哩、南北千三百哩の廣大な海洋にちらばる大小千有餘の島々がこれであつて、マリアナ、パラオ、ヤップ、マーシャル、カロリンの諸

群島に分れてゐる。

この諸島の面積は約百四十万里で全部を合せても東京府位の大きさはなく、島民五万余人内地人二萬五千人合計約八萬人の人口を有してゐる。

これを産業的に見ると、農業としては甘蔗の栽培が第一位であつて、將來益々有望である。鑛業としてはアンガウル島の燐鑛採掘があり、林業としては椰子が稍々見るに足る程度であるが、水産業は鯷及び鮪及び貝類が豊富で、南洋鯷節の製造も行はれ、水産物の産額は年百九十萬圓に及ぶ。我が南洋廳は純島民子弟のために、公學校を設けて教育を施し、衛生、風俗、投産その他の指導にも鋭意つとめてゐる。

昭和十年三月我國が正式に國際聯盟を脱退すると共に、委任統治區となつてゐたこの南洋群島を國際聯盟に返還すべきであるといふ、議論が聯盟筋や米國側から起りつゝあるのであるが、これはさういふ机上の解釋で成り立たぬと思ふ。手取り早く云へばこの權利は我が國が世界大戰に參戦し、特に我が海軍が太平洋上は勿論印度洋地中海にまで遠征して、兇暴な獨逸潛航艇や軍艦の脅威に月もあてられぬ聯合國側の後方輸送線の保護をしてやつた御禮である。事實英本國の如きは日本

海軍のために、糧道を斷たれず済んだと、涙を流さんばかりに喜んだのである。

特に地中海遠征中の明石始め松、杉、檜、桃といったやうな、十幾隻かの驅逐艦は、目ざましい活躍をして、我が海軍の如きは獨逸潛航艇の雷撃に會つて、艦首を吹き飛ばされ、上原艦長以下死傷者を數十名を出すと云ふ犠牲さへ拂つた。

我が海軍への感謝は佛、伊の兩國も同じで、一九一七年日英佛伊間に南洋群島を戰利品として領有し得る密約が結ばれ、更にベルサイユ條約によつて、「占領地の主權は主なる同盟國に移るといふ」條文で確實化されたものである。随つて、その後成立した不參戰國を含む國際聯盟に更にこの主權が移動するとの説は成り立たぬと見るべきである。

昭和十年三月の名實脱退の時期ともなれば、或ひは米國あたりの尻押しで聯盟屋の連中がとやかく云つて來るであらうが、何かどうあらうともこれは手離すことが出來ないのであつて、我が國は實力に訴へてもこれを確保せんとする決心を有してゐるのである。南洋群島が何故に軍事上に生命線を構成してゐるか云ふことは、地圖を一覽すればすぐ判ることである。即ちハワイ、グアム、フィリッピン等の根據地を連結する米海軍の東洋進出線は、グアム島のあたりで、我が海上生命線

である小笠原列島、南洋群島のために遮断されてゐるのである。

而してよく我が艦隊を收容するに足る良灣があり、一朝事ある場合は艦隊への補給、潜水艦の根據地として十分に役立つのであつて、これがあるがため米海軍の西太平洋進攻作戦に著しい不安を感じるのであつて、この點、實に幾隻かの戦艦、航空母艦に優る力強い存在なのである。

我が海軍の使命

海軍が陸軍と共に國防の第一線に立つことは勿論であるが、この國防たるや自國の國土に敵軍を寄せつけないだけを任務としたのは昔の事で、今では我國と種々の物資を交換貿易してゐる外國との經濟的連絡を鞏固にし、如何なる非常時に於てもこれを確保して、自國の産業を萎微させたり、國民の衣食に不自由させないやうにするのが、眞の使命であるとするべきである。即ち海上權を確實に握ることである。早い話が日本と滿洲との連絡線を守ることは、各國の經濟封鎖を蒙つたやうな場合何より肝要な事である。

勿論我國は西太平洋上の孤島であつて國內の資源に乏しく、自給自足は困難な立場にあるので特

に生産品の販路を世界に求め、又必要な物資はこれを輸入に仰がなくてはならない。

一例を南方に見ても英領印度、蘭領印度からは、棉花、原油、生ゴム、鉄鐵等を輸入して、我國からは綿製品、陶磁器、雜貨品を輸出してゐるが如きである。

なほこゝに付けかへなければならぬことは隣邦支那が日支事變以來、米國と結んで我國を牽制せんとする機運が濃厚で、米支密約すら傳へられることである。

それによると米國は五年間支那空軍の發達を圖り、航空事業は米支の獨占とし、費用も半額は米國が負擔し、その他飛行機製造工場一、修理工場一、を建て、本年度内に汕頭、泉州、鎮海、海州に飛行場を建設し米國機の自由着陸を許すといふのである。

支那の御大蔣介石は更に明年六月までに百五十、機明後年六月までに二百六十機、明々後年六月までに四百二十機、その外既に計畫された分及び現有機を合せて千二百機を備へ、我國に一泡ふかせんとしてゐるのであつて之が事實とすれば、九州はおろか、日本全土は非常な危険に曝らされるのである。而してその背後に米國があり、いざと云ふ場合利用されることを知るならば、我々は今後の施設ぶりを注目すべきである。

最近支那は幾分親日的になつて來たと云ふことであるが、これは表面的だけのことで、肚の中は判つたものでない。支那は日支事變以來、日本を仇敵視してゐるから、一面親日、一面抗日といふ兩刀を巧みに使つて、一九三六年の日本の危機に際し、英米國等と共同戦線を張つて、抗日的行動に出るではないかと思はれる。

それが、もしも實現して、米空軍の根據地が支那大陸に出来るやうなことになる、我々は後門の虎ならぬ、鷲の群れに惱ませられることなる。

日米海軍力の比較

まづ海軍兵力の骨幹をなす主力艦について比較して見やう。この制限隻数は我が九隻に對し、米國十五隻で一〇對六の比率である。

艦名	總排水量	速力	砲門	砲門	高角砲	水雷發射管
日本 陸奥	三二、七二〇噸	二三ノット	四十種八門	十四種二十門	八種高角四	八
米國 コロラド	三二、五〇〇噸	二二ノット	四十種八門	十三種十二門	三三種高角八	二

となつてゐる。

總排水量に於ては略々同様で陸奥の方が二二〇トンだけ大きいのである。

攻撃兵器である四十種砲は双方共八門で同じである。どつちの大砲の彈丸が遠くへ届くかといふと、これは仰角(砲口の上へ)で違ふが、約三千三百米から三千五百米位で日本の方が優れてゐるやうに、外國の本には書いてある。

大砲の彈丸が遠くまで届く届かないは、いざ決戦といふ場合に大きな差違を生じるので、こつちの彈丸が届かない距離のうちに、先方から射たれてしまふこととなる。三萬三千米といふと、ざつと八里の距離で東京から横濱位離れてゐるので、軍艦同志は敵艦を見ることが出来ない。距離測定用の飛行機が、これを一々觀測して通報するのである。

副砲に於ては砲門の多い點で陸奥が有利であるが、高角砲では、コロラドの方が大きく砲門も多い。それは飛行機の爆撃に備へたのであることは勿論である。

更に魚雷發射管では、コロラドがたつた二門しかないのに、陸奥の方は八門であるから、斷然優勢である。しかも水雷戰術は、我が海軍の得意とするところであり、三四十浬の速力で二萬メートル

ルに達するのであるから、その威力は大である。

次に速力であるが、我が陸奥の二十三ノットに對し、コロラドは二十一ノットで二ノットだけ陸奥が優つてゐるのである。この速力の早いといふことは逃げゆく敵艦に追いついて砲撃する時は便利であるし、或は作戦上敵の着弾距離から遠ざかる時にも大いに役立つのである。

次に航続力は米國の方は太平洋を越して來る渡洋作戦上、あらゆる犠牲を拂つて長距離主義となし、十五ノットで一萬二千哩を走るとの事であるが、陸奥の方はさうした主義に基づかないので航続力は少いと見るべきである。

次に防禦の方面であるがこれを比較して見ると、

	水線甲帯	甲板	主砲塔
日本	陸奥	十三インチ	七インチ
		十二インチ	三、五インチ
			十四インチ
米國	コロラド	十六インチ	五インチ
		十四インチ	三インチ
			十八インチ

となる。水線甲帯（浮んでゐる時水のついてゐるあたり）と主砲を入れておく塔とは陸奥の方が薄

いが、甲板は厚い。然し日本の製鋼術は進んでゐるので、實質に於ては、必ずしも劣つてゐるとは見ることが出来ない。それにこれからの敵艦は遠距離射撃のため、上から斜めに落ちて來るし飛行機の空爆を受けやすいので、甲板の厚いことは強味である。

これは世界大戦中デットランドの海戦で最大の英國の巡洋戦艦クキン・デーが獨逸の軍艦に甲板を射ち抜かれて沈んだことでもよくわかる。又そのマストであるが、この中には敵艦の位置や速力を測つたり、自艦の大砲を指揮して一齊に射撃させる設備がある。陸奥の艦でも積み重ねたやうにがつちりしてゐるが、コロラドの一寸見たいは塔臺式の籠マストである。

これは日本の方ががつちりしてゐるやうである。米國でもこの點に氣がついたか改装後の戦艦ニユーメキシコなどを見ると大分日本式の櫓マストになつて來た。

又煙突を見ると、日本のは後ろへヒン曲つて、マストの上で活動する人を臂が邪魔したり、熱い思ひをさせないやうにしてゐるが、コロラドのはまっ直ぐに立つてゐる。

こゝに陸奥の優秀さを物語る一挿話として過ぐるワシントン會議に於て、英米兩國は何とかして恐るべき威力の日本の陸奥を廢艦させやうとして、もし陸奥を廢艦にするならば、米國はこゝで比

較してゐる相手のコロラドと同じく優秀を許るウエスト、バーチニヤの建造を中止するし、英國もネルソン、ロドネーの建造を中止すると云ふ難題を持ちかけて来た。

その時陸奥は完成してしまつたわし、英米の方のはまだ出来上つてゐないものを持出しての話であつたので、勿論我國はこの相談には乗らなかつた。

以上が現在の大體の比較であるが、陸奥は最近この上とも裝備を改めることとなつたから、一層超威力を發揮するに至るであらう。

而して我國には陸奥の姉妹艦として、同じく改装中の長門があり、外に日向、伊勢、山城、扶桑、榛名、霧島、金剛、比叡の諸艦がある。

この中比叡は條約による九隻の制限外として練習用に供されることとなつてゐる。又榛名、霧島、金剛等の諸艦は二十六ノット以上快速力を持つて居るので、いざといふ場合はこの足の力が物を云ふであらう。

なほ以上の戦艦には建造の古いのがあるが甲板の装甲を厚くし、備砲の仰角を上げ、櫓を建て直し、汽鐘を改造して、重油専門とし、火力を強く煙を少し、航続力を大きくする等改装されて新式

艦同様となつてゐる。

尙米國には主力艦として、以上のコロラド、ウエスト・バーチニア、メリーランドの十六インチ砲戦艦と、ネグアダ、カリフォルニア、オクラホマ、テネシー、アイダホ、ペンシルバニア、アリゾナ、デネツシー、ニューメキシコ、ミシヅビイ、ニューヨークの十四インチ砲戦艦とアーカンスの十二オンス戦艦等十五隻を有し、外には廢艦處分になつてゐるワイオーミング、ユータ等がある。

次ぎには航空母艦であるが米國の航空母艦の代表はサラトガ、レキシントンである。今我が代表航空母艦赤城と比べて見ると、

日本	赤城	二二六、九〇〇噸	二十八節半	二十サンチ十門	?
米國	サラトガ	三三三、〇〇〇噸	三十三節	二十サンチ八門	登載百〇八機

となる。總排水量及び、速力に於てサラトガが大いに勝つてゐる。又備砲も日本のは片舷に五門であるのに對し、サラトガのはぐるりと方向が換へられるので、有利である。登載機はサラトガ百八機、赤城は五六十機といはれるが、はつきりした事はわからない。何れにせよサラトガの方が六千

トンも大きな船であるから、機数は多いものと見られる。なほ赤城とサラトガも始めは四萬何千トンの巡洋戦艦になる筈のが、ワシントン會議で航空母艦につくりかへられたのである。しかし最近では航空母艦は馬鹿に大きくする必要がないと云ふので、米國は現存のサラトガ、レキシントン、レンヂャリー、(一三、八〇〇トン)があり外に二萬トン級を二隻(百二十機搭載)と航空巡洋艦一〇、〇〇〇トン(三四十機搭載)一隻を作ることになつてゐる。

我國に於ては赤城加賀(二六、九〇〇トン)及び鳳翔(七、四七〇トン)龍驤(七、六〇〇トン)(建造中)の四隻と別に一萬トン級のものが一隻又は二隻建造される豫定である。

海軍の花形として、偵察に、主力艦の助力に、奇襲に駆逐艦の擁護に、その快速力を利用して縦横に飛び廻る一萬トン大巡洋艦では、

日本	摩耶	一萬噸	二十サンチ十門	三十三ノット	十三萬馬力
米國	アストリヤ	一萬噸	二十サンチ九門	三十二ノット	十萬七千馬力

兩艦共カタバルト飛行機打出機は二箇、登載飛行機六機で、防禦力は兩方三吋四吋の鋼鐵張りで航積

力は摩耶が多いやうである。

數字の上では摩耶が優れてゐるが實戰に於ても、これが烏海、愛宕、高雄、足柄、羽黒、那智、妙高の僚艦と共に沈着豪膽な司令官に指揮される時は、目ざましい活躍をするであらう。

なほこゝに特記しなければならぬことは、我が一萬トン巡洋艦は平賀造船中將以下の造船官が頭腦を絞つて造つたもので、世界の海軍をして驚異の眼を見はらしたものである。

その構造は殆んど兵器によつて塞げられ、兵員の起居活動に著しく窮屈なものであつて、この點米國の軍艦が劇場やホテル式なのは格段の差がある。この間横濱に寄港した米國アジア艦隊の旗艦ヒューストン(新一萬トン巡洋艦)にしても外見は如何にも優美な船で、我巡洋艦のがつちりした裝備と比べると、熊谷次郎直實と敦盛ほど感じが違ふのである。

米國では目下この一萬トン巡洋艦に全力を注いで建造中で昭和九年には兩方共十二隻づゝのが、昭和十一年末には米國が十六隻、我國は依然十二隻で、この比率は七割一分となる。

次ぎに乙級巡洋艦は昭和十二年末には米國十七隻の我國は十二隻となり比率も八割九分となり、これが一番日本にとつて比率がいゝのである。

中でも夕張の如きは二千八百九十トンといふ小艦ながら、五六千トン級のものに負けないやうな六インチ砲六門といふ備砲を持つてゐる。なほやがて造られるところの我が八千五百トン級の鈴谷級の巡洋艦が如何なる雄姿を現はすであらうかは、世界注目の的であるが、恐らくこゝにも常に世界のトップを切る我が造船官の頭腦が、又新機軸を開いて驚異すべき新鋭艦が造られ、列國海軍を断然引離すことであらう。

次ぎに驅逐艦に於ては、昭和十二年末に於ては米國一一六隻、日本七六隻、比率七割となるのであるが、こゝにも我が夕霧級のすばらしいものが十數隻もある。米國の驅逐艦には舊式のものが多いが、米國のヤーネル少將をして「米國の百五十隻の驅逐艦と、日本の三十隻の驅逐艦と取代へてもよい」と嘆聲を洩らさしめたほどである。

驅逐艦の任務は魚雷發射管を武器として、四隻とか八隻とか、十六隻とか隊を組み快速力で敵の艦隊を襲撃するし、敵の巡洋艦や驅逐艦とも大砲を以て渡り合ふ。この外敵潜水艇に爆雷を投じたり、輸送保護、偵察、哨戒及び我が主力艦の用心棒として敵潛航艇の警戒に當り、煙幕を張り、機械小雷の撒かれてゐる海では掃海作業を行ふ等種々の任務を有し、特に夜間の戦闘は彼等の舞臺

で、時によく敵の主力艦を斃すのである。小さいながらピリリとしたところのあるのが、その特長で、その男らしき勇壯さは、艦種中随一である。特に我國のは凌波性に意を用ひてあるので太平洋の怒濤を蹴つて活動することが出来る。

次ぎには潜水艇であるが、これはロンドン會議で比率を日米同率を定められた。我國が潜水艇に期待するところは多大で、これが研究と運用にかけては、世界一であると自信してゐる。

而も狭苦しく種々の機械がぎつしり詰つた中で、不自由を忍びつゝ全員の殆んどが責任ある職務を分擔して働く。これが又日本人ならではの出来ないことである。

米國では潜水艇乗りは希望者が少い。それでいざといふ場合の補充には困難を來すのではないかと云はれてゐる。

そしてその乗組員も、まづ海中に潜水艇の模型をつくつていざ沈没といふ時に、抜け出し水面に浮び上る稽古をしてこれが上達すると始めて正式の乗組員になるとの事である。こんな乗組員は日本には一人だつてゐはしない。まだ潜水艇の試作時代で危な氣の多かつた時代に於てさへ佐久間艇

長等は悠然として、今日から見ればオモチヤ同様のものへ乗組まれたのである。

潜水艇の任務は警戒してゐる巡洋艦や驅逐艦や飛行機の目を掠め、底をくゞつて敵の主力艦や航空母艦に近づき魚雷攻撃を加へてこれを葬むるのが主な任務で、その外敵の運送船を沈めたり、沿岸を襲撃して、敵國民に精神的脅威を與へる等の仕事もする。

歐洲大戰の時たつた五百トンの獨逸潜水艇は英國の装甲巡洋艦を、二日間に四隻を沈めてゐるし或は米國まで使に往復し、聯合國側の輸送線を攪亂したことは多大であつた。

かく云ふ日本の潜航艇も獨逸からの戦利品が、研究資料となり改良が加へられて、今日では伊號一號級のやうなすばらしいものが出來た。

前頁で乗組員のことを一寸くさしたが米國の方にも潜水巡洋艦とも云ふべき、ノーチラス、ノーールなどといふ二千七百餘トンもある大きなのが居て、飛行機を積んで居り航続力二千五百哩、三ヶ月位は獨力で暴れ廻る力がある。しかもかうしたのが十隻もあり、その外舊式も入れると全部で昭和十一年には四十八隻も揃ふことになる。

これ等が日本近海へのそのそやつて來て辻強盜式に出沒されるとちとうるさい事になる。

我國に於ても世界注視的となつてゐる。伊號第一號―第五號があり、排水量水上一、九五五トン、水中二、五〇〇トン、速力水上十七哩二一吋發射管六門、航續力は二萬哩以上で、飛行機も一臺積んでゐると、外國の本に出でゐる。

この外伊號六十四號級伊號六十八號級等の艦隊潜水艇も侮りがたい性能を有してゐる。

最後は飛行機である。今後の海戦はすべて、「制海權は制空權から」

といふ立前から飛行機が、いの一番駛けをして、開戦の火ぶたを切るのである。その任務によつて偵察機、攻撃機、戦闘機に分れ、中には兼ねたものもある。航空母艦から着發するものは、陸軍機のやうに車輪がついてゐる、カタパルトで射出されるものはポートがついてゐる。着艦の際には水上へ着水したものを釣り上げるのである。

飛行機は現在軍神會議の製限外にあるので、列國ともこの發達には最も熱心に研究中である。それに二三年立つと新鋭なのが後から後から現はれて來るので、その生命が短くために少なからぬ金を食ふのである。

米國にはカーチス戦闘爆撃機、マルチン爆撃機、ボーイング戦闘機などの優秀機があり、我れにも九〇式戦闘機、十三式攻撃機があり、空中戦は文字通り火花を散らすことになる。

日米若し戦はゞ

以上で日米海軍に關する一通りの説明はつきた。よつて最後に來るものは彼等の豪語する「極東への進出は、米國の傳統的國策であり、その爲には近き將來に大艦隊の太平洋進攻戦を執行する」と云つてゐるが、その近き將來はいつであるか。恐らく彼等の實力が充實して、絶對必勝の自信を抱くに至つたときが、それであると見て間違ひなからう。

戦争は國運を堵しての重大事で、もとより歓迎すべき事ではないが、我が備へ固しと見れば、彼等も手を出し得ないであらうし、我れに乗すべき隙ありと見れば、一舉に衝いて來るであらう。以下筆者もその近き將來の日米戦を豫想して見る。こゝに一寸お断りしなければならぬ事は或種の兵器は將來必ず現はれることを想像したものであることを御承知願ひたい。

まづ第一に、米海軍の東洋進攻作戦が、實施されるのは、その全海軍が太平洋岸に集中した時である。の時が若し大西洋岸に若干艦隊がありとすれば、彼等はパナマ運河を急行通過して數日内に太平洋岸に達するであらう。従つてパナマ運河の破壊といふやうな事はまづなからうと信するが、この邊の防備は砲臺あり、飛行隊あり、極はめて嚴重である。

而してその第一集中地點が背後に世界の油槽と云はれるカルホルニヤの大油田を有するサンフランシスコであることは間違ひない。こゝで油田直通の數條の大パイプによつて、原動力たる重油を腹一杯詰めこみ、ロスアンゼルス近くのサンペトロか、サンチエゴあたりで勢揃ひをして、その前進根據地であるハワイのパール軍港目指して進發するであらう。この間に日本の伊號一號級が太平洋を往復し得る性能を以てのこの邊まで遠征しはすまいかと、巡洋艦や驅逐艦で二重三重に警戒するであらうし、又日本の金剛級に航空母艦を配した數隻の快速戦隊の奇襲もありはしないかと、頭痛鉢巻で飛行機を見張を怠らぬであらう。

斯る状態になると、仕掛けられた喧嘩で我國も自衛上やむなく立なくてはならない。即ち第一に自指すところは、敵の東洋に於ける根據地フィリッピン群島であり、南洋のグアム島である。

このフィリッピンには米國のアジア艦隊が居り、その根據地はマニラ港である。こゝには三十六サンチの巨砲を有する砲臺の設備も完全で、守備軍も米人軍が約一萬八千人、土民軍が六千人あり飛行隊もあり、毒ガス隊も機械化隊もある。

アヂア艦隊には、この間横濱へ寄港した一萬トン巡洋艦ヒュウストンを旗艦として驅逐艦數隻と潜水艇が六隻が居る。このヒュウストンは快速力の上に、二十サンチ砲を九門も備へてゐるので我が一萬トン級巡洋艦でないと大刀打ちが出来ないわけだ。これが六隻の潜水艇と共に支那海、日本海方面に暴れ出すとそれこそ事であるから、これを逸早く海軍の手で仕止めると共に、敵の飛行隊をたゞきつぶす事が肝要で、このためには壯烈な空中戦が行はれるであらう。また陸軍も幾部隊かと遠征して、結局幾日かの後マニラを陥れることになるであらう。こゝが我手に歸することは南方の我が通商線を保護して鐵や石炭などの戰時資源を補給を容易にするのである。

更にグアム島は我が南洋群島の間に挟まれて居て要塞もあり、守備兵もあるが、これは時間の問題で我が手に歸するであらう。

ハワイやミッドウエー島に、數年前から虎視眈々としてこの日あるを睨つてゐた、敵の潜水艇三

十數隻は、時こそ來れりと、日本近海へ現はれてあはよくば、我が戰艦か、航空母艦位をものしやうと活動するであらう。

又北方アラスカのシトカ要港かダツチハーバー港あたりを根城にして、汽船を急仕立にした航空母艦が飛行機を積んで、驅逐艦と共にアリユーション群島傳ひに、千島方面から襲ひかゝらうとするかもしれない、しかしこのコースは冬季氷結し、しかも濃霧が多く、一年を通じて、荒天の時が多いので恐らく成功すまい。それに開戦になつても千島が無防備にしてある氣遣ひはなく、又我が驅逐艦はこの北海の荒天には試煉すみなのである。否まごつくとあべこべに、こつちからアラスカをたゞくかもしれない。又東京驛を一呑みにするやうな巨大な飛行船メーコン號が數臺の搭載飛行機に周圍を警戒させながら、突如東京へ空襲を敢行し、焼夷弾をばらまくかもしれない。しかもこの飛行船は休みつこなし又アメリカまで歸ることが出来るし、こいつが、パトカのやうな繫留船を根城にして、搜索に攻撃に飛び廻はれられると事面倒だ。

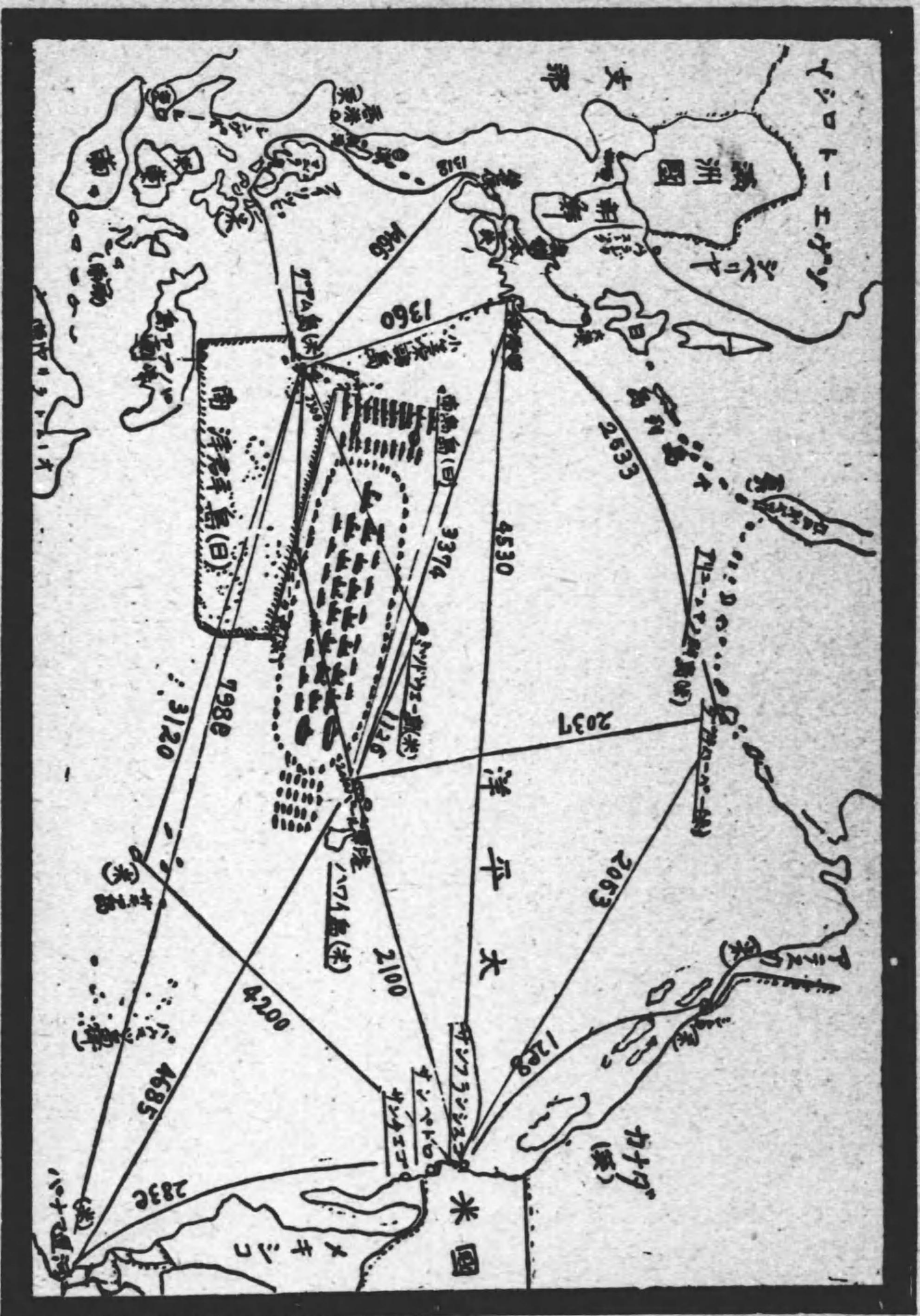
又南方でも我が南洋群島の近くの海上にある、サモア島ウエーク島あたりから、潜航艇を繰り出し、東、南、北各方面から相呼應活動して、我が艦隊の勢力を分散せしめやうと圖るかもしれない

し、時に二三の快速巡洋艦で一寸北海道沖あたりに現はれて牽制するかもしれぬ。

さてハワイのパール軍港で、重油を補給した米國艦隊は、水路の掃海作業がすむといよ／＼十何年の経験を實行して、全太平洋の制海權を一手に握るはその時とばかりに堂々圓形渡洋陣をつくつて、外洋へ押出して來るであらう。

まつ最前列にはアトラス、チエスター級の八インチ砲、一萬トン甲級巡洋艦十隻が、横一列に約二十哩の間隔で並行して來る。その後にはレンヂャー、ラングレーの一萬四千トン航空母艦が、何れも八十機位を載せてやつてくる。更にそのあとへは乙級七千トン級のローリー、デトロイド級の巡洋艦が目をもたして進んでゆく。最前列の夜間のうちに突破して來た、潜水艦や驅逐艦があつても、こゝでは晝間になるので、樂に、とつて押へやうとする周到な構へである。

以上の前衛部隊からは、飛行機が飛ばされて空からの監視を怠らない。これにつゞくのが圓形陣の本陣で、約百隻の驅逐艦が卵形にならんで卵の殻の役目をつとめてゆく。次ぎに白味に相當するところに、残りの數隻の一萬トン甲級巡洋艦と乙級巡洋艦が警戒陣をひき、まん中の黄味に相當するところには、司令長官の大將旗をひるがへした總旗艦ベンシルベニアを始め、十四隻の主力



太平洋要圖
◆圖中の艦列は米海軍圓形陣を示す……◆艦種については前頁本文参照のこと

戦艦が二列縦隊をつくつて進んでゆくし、その後ろにはサラトガ、レキシントンと外一隻の大航空母艦の姿が見える。卵形陣のあとへは二十數隻の給油戦始め工作戦、食糧船、病院船が四十幾隻が随行してゆく。

全艦二百隻の大艦隊の堂々海を歴しての東洋への出陣である。

行く先はいづこか？ わが南洋群島を掠めて、マニラへ向ふか、それとも北から来るか、恐らくこれは燃料その他の關係から一路東京灣口目指して直進して来るであらう。サンペトロ乃至サンフランシスコからハワイ、ミッドウエーを結ぶ米艦隊のコース上に於て、南洋群島を根據とする我が潜水艇群若しくは奇襲艦隊が捨身の戦法に出てゐたとすれば、米艦隊の航空母艦の一二隻や戦艦の二つ三つは仕止めるかもしれない。これは敵にとつて大痛手となるわけで特に飛行隊の勢力を弱くすることはまづ制空を志す彼等にとつて堪えられない苦痛となるであらう。しかし軍に於ても、敵の爆雷によつて潜水艇のいくつかは太平洋の花と散つてしまふであらう。

やがて血眼の搜索をつとけてゐた、南島島あたりを根據とするわが飛行艇によつて、魚雷や砲彈を避けつゝ電光形に航進して来る敵の艦隊が、発見され、有史以來未曾有の大海戦の幕は切つてお

とされるであらう。

まづ敵の航空母艦から放たれた約五六百機と艦上機が二百機位（これは我が奇襲による敵艦の減滅で少くなつてゐるかもしれない）が三機五機七機の編隊で群れをなして襲つてくるであらう。

これに對して我が赤城、加賀等五隻の航空母艦から出發した飛行機が、これも敵の主力艦や航空母艦を探して急襲するであらう。この頃我が摩耶、鳥海以下八隻級の一マントン巡洋艦は敵の前衛部隊や航空母艦の近くに肉薄して文字通り血みどろに戦ふであらうし、双方の戦闘機は機關銃で火を吹きながら渡り合ひ、攻撃機はこゝを先途と攻め立て彼のカーチス戦闘爆撃機やマルチン急下降爆撃機は我が甲板近くまで急轉直下して爆彈を投じ、艦上の兵員を機關銃で掃射するであらう。

何しろ新鋭なものになると、カツチン、カツチンの一秒間に七十米から百米飛ぶし、急下降の時などは四五千メートルを二三十秒間で彈丸の如く落ちて来るので、高射砲の標準などつけてゐられない位である。

又上るときにも五分間位で富士山位の高きまで上つてしまふ結局スピットが優れて、操縦手や射手のうでの良い方が勝つことになる。

中には毒ガス弾を投ずるものもあるので、兵員は防毒装置もしなくてはならない。我が飛行隊は、小笠原島や南鳥島あたりの飛行隊からの應援を得て、敵の航空母艦を襲撃し、敵空軍の足場を取拂ふべく甲板をぼこぼこに破壊し、又魚雷を抱へた一隊の飛行機が、これを横腹へたいきつけてその全滅を圖るであらう。かくなる時は、敵の飛行機は歸るに巢なく、海上の藻屑とならなくてはならない。又艦載飛行機も戦闘中到底艦内へ收容してゐるすきがないので、同様のみぢめな状態に陥ることとなる。

我が飛行士のうちには、爆弾を積んだまゝ、敵の主力艦目がけて猛烈に突進するやうな勇敢な士も出て来るであらう。やがて彼等の艦隊が三萬五千米位まで接近すると飛行機の観測によつて、巨砲の應酬が開始され何百門の巨砲の咆哮は、百雷の如く太平洋の海神の鼓膜をふつとばすであらう。駆逐艦によつて煙幕は展開せられ、魚雷は射出され、敵艦の進路に機雷はぶちまかれ、水煙は奔騰し一瞬にして震天動地の巷と化するのである。

電波操縦の魚雷や、飛行機をばたくと落すやうな強力光線も實用に供せられるかもしれない。いし、特別の不視塗料を施した姿の見えぬ飛行機が出てくるかもしれない。

そればかりでなく無人の艦隊や飛行隊が電波によつて、操縦せられ敵艦を侵して進撃し、煙幕を張り、魚雷を發射し、大砲を射撃して、自由自由の海に空にあれば廻るとしたらどうであらう。想像するだに奇觀壯觀ではないか。

その上この操縦電波を互に妨害し合ふやうな事もあるかもしれない。

やがて海戦が夜に入れば、晝を欺く光弾の下に我が駆逐隊の面々は敵の主力艦とさし違へて死ねべし、二十五吋の魚雷を矢つぎ早にぶつ放して、攻め立てるであらう。そして夜の白々と明ける頃には、敵の主力艦、航空母艦のいくつかは、或は影を失ひ、或は破壊され、或はひびつこをひいて戦列を離れてゐるやうになるだらう。

これに對して我軍の被害も相當であつて、快速戦艦や甲級乙級の快速巡洋艦の中にはマストを折られ、煙突をとばされ、甲板を穴だらけにしたのが出來てくるであらうし、又は敵艦の犠牲となるものがあるかもしれない。ともかく一にも攻撃二にも攻撃で徹底的に相手をやつつけやうと捨身の戦法に出るであらう。

しかし何せい自國海岸に近く、先方の限られた飛行機に對して、沿岸小笠原島、横須賀、館山、

霞浦等の應援機が、あとからあとから補充されて戦列に加はれる事は心強いことである。

唯一の頼みである空軍をノックアウトされた遠征艦隊は可成りみぢめである。以上の如き状態で大勢は決するであらう。これで太平洋戦争は一段落となり、先方も男らしく兜をぬぐことであらう。

もしも、そのことがなければ我艦隊のハワイ遠征カルホルニヤ攻略などと彼等が日頃恐怖してゐる事の實現となるのであるが、我國には東洋の地の守ること以外に野心のないことを示して、一應彼に勧告するであらうし、彼も亦我が要求を容れ、結局東洋への野心を放擲をするの餘儀なきに至るであらう。

最後に英國は新鋭艦を續々建造しシンガポール軍港を完成して、我れに脅威を與へるに十分であるが、本國の關係上極東に大艦隊を送り得ない事情にあるが、それとて我旗色危しと見れば、米國の肩を持つかもしれぬから決して油断はならない。しかし日米どつちが弱り込んでも徳するのは英國だから、勘定高い英國は傍觀して明日の御馳走を待つことと推察される。 —終—

危機一九三六年

赤露の脅威

佐藤鐵城著

知識と修養會

報 畫 情 軍 ト ー エ ヴ ソ



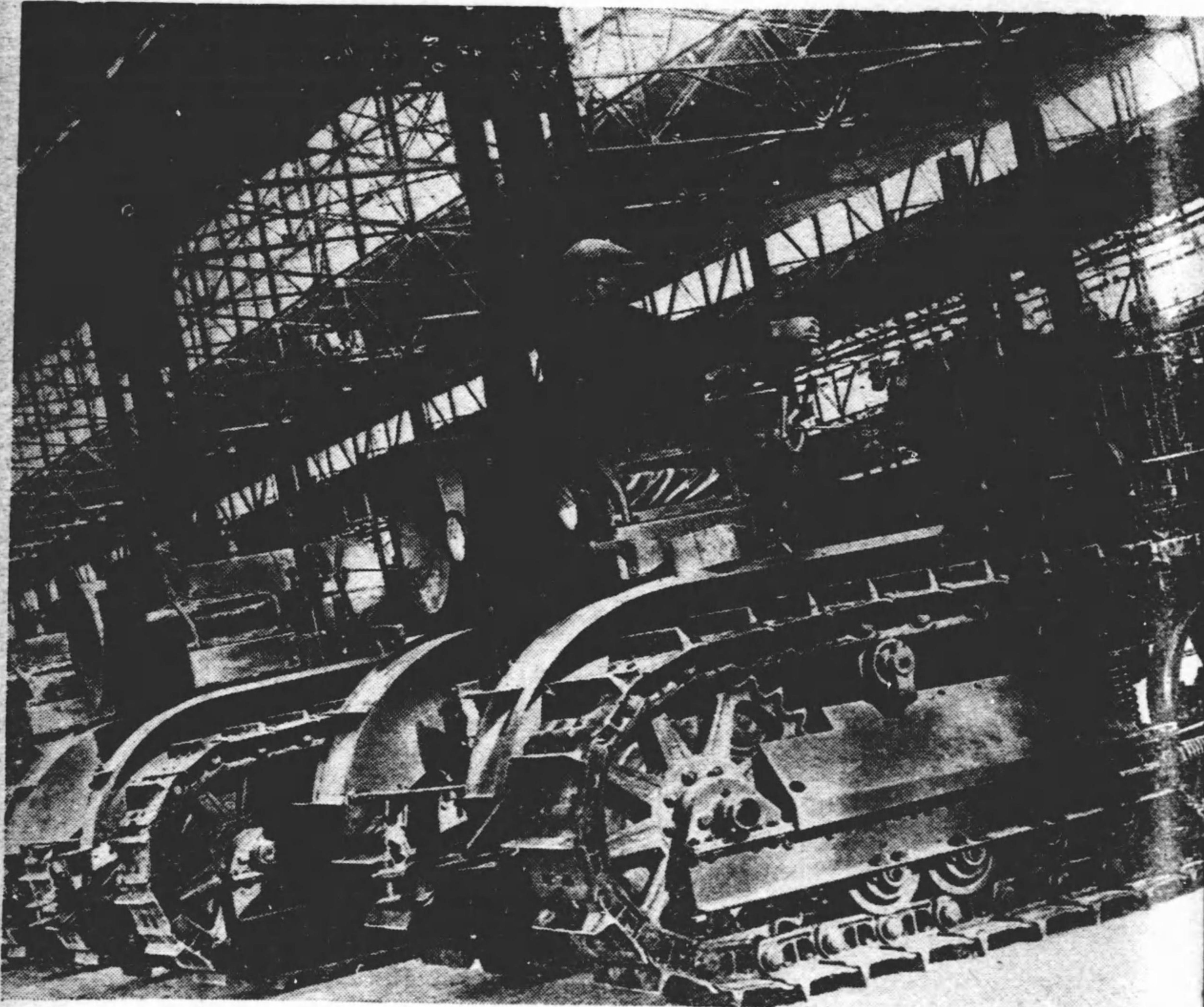
。でのもす示を部一の場工ータクラトるけ於にクスンピアリエチは圖上
 はータクラトのこほな。るあで事のとるす有を力能作製の臺百くよ日一
 すり變早と車戦は合場ふ云とざいひ云とータクラト型るひあ。らか状型
 。るゐて來出にうやる

目 次

報 畫 軍 赤

◆	チェリアピンスクのトラクター工場	二
◆	赤軍の渡河演習	三
◆	赤軍の砲兵隊及び自動車砲隊	四
◆	ドニエロプルの發電所	五
◆	軍備強化ポスターと歩兵隊	六
◆	バクラーの大油田	七
◆	ANT式爆撃機と騎砲兵	八
◆	赤軍觀兵式	九
◆	危機に際して	一〇
◆	露國の極東政策	一一
◆	日滿ソの關係	一二
◆	ソ國の極東赤化運動	一三
◆	ソ國の軍備擴張と極東の戦備	一四
◆	滿洲國の治安と皇軍の活動	一五
◆	日ソ若し戦はゞ	一六
◆	東部戦線	一七
◆	赤軍極東配置要圖	一八
◆	北部戦線	一九
◆	西部戦線	二〇
◆	外國誌に現れた日露戦争觀	二一

報 畫 情 軍 ト ー エ ヴ ソ

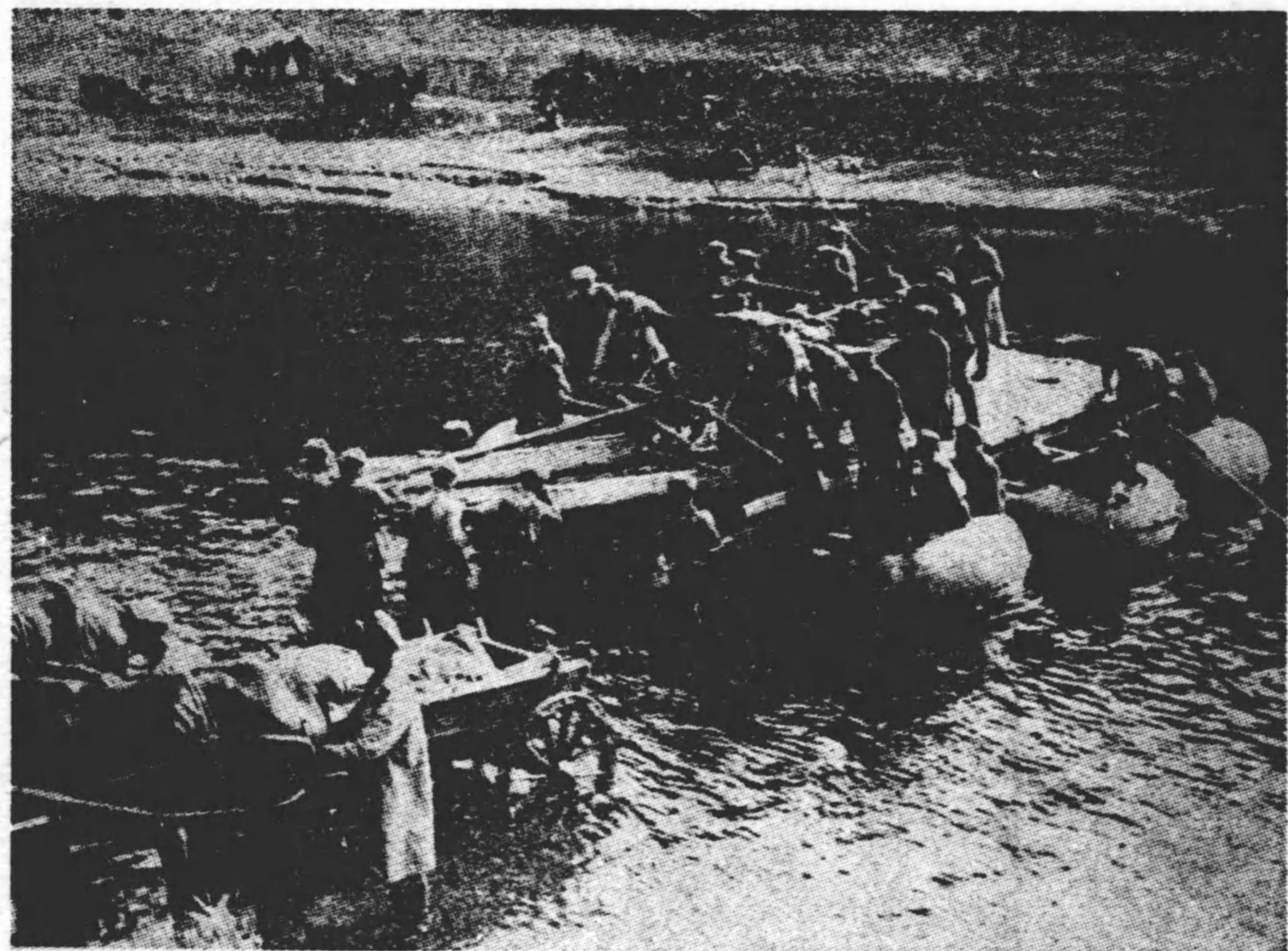
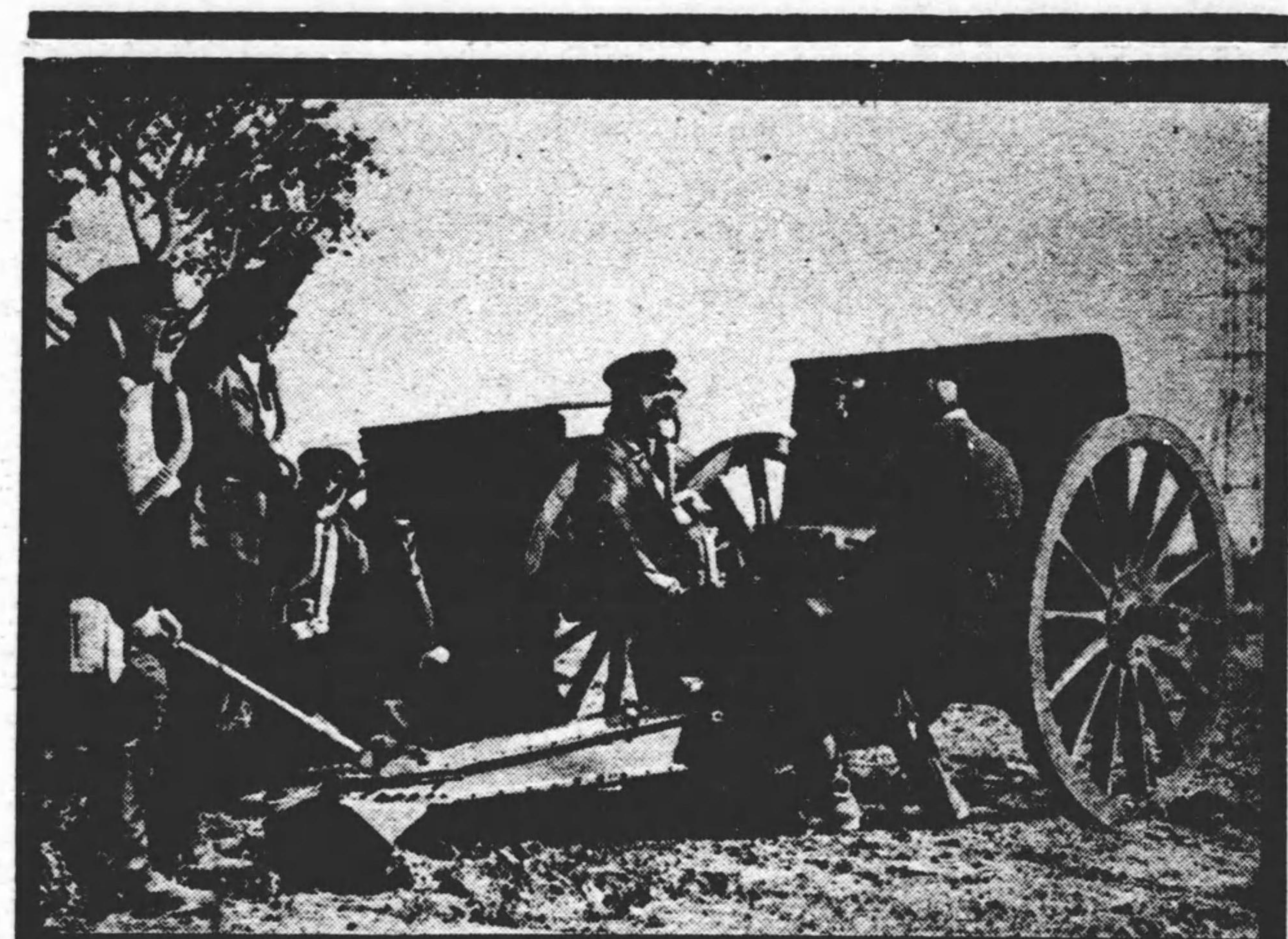


。でのもす示を部一の場工ータクラトるけ於にクスンピアリエチは圖上
 は一タクラトのこほな。るあで事のとるす有を力能作製の臺百くよ日一
 すり變早と車戦は合場ふ云とざいひ云と一タクラト型るひあ。らか狀型
 。るゐて來出にうやる

目 次

報 畫 軍 赤

◆	チェリアピンスクのトラクター工場	1
◆	赤軍の砲兵隊及び自動車砲隊	2
◆	ドニエロプルの發電所	3
◆	軍備強化ボスターと歩兵隊	4
◆	バクラーの大油田	5
◆	ANT式爆撃機と騎砲兵	6
◆	赤軍觀兵式	7
◆	危機に際して	8
◆	露國の極東政策	11
◆	日滿ソの關係	12
◆	ソ國の極東赤化運動	15
◆	ソ國の軍備擴張と極東の戦備	16
◆	滿洲國の治安と皇軍の活動	18
◆	日ソ若し戦はゞ	22
◆	東部戦線	23
◆	赤軍極東配置要圖	23
◆	北部戦線	24
◆	西部戦線	25
◆	外國誌に現れた日露戦争觀	27

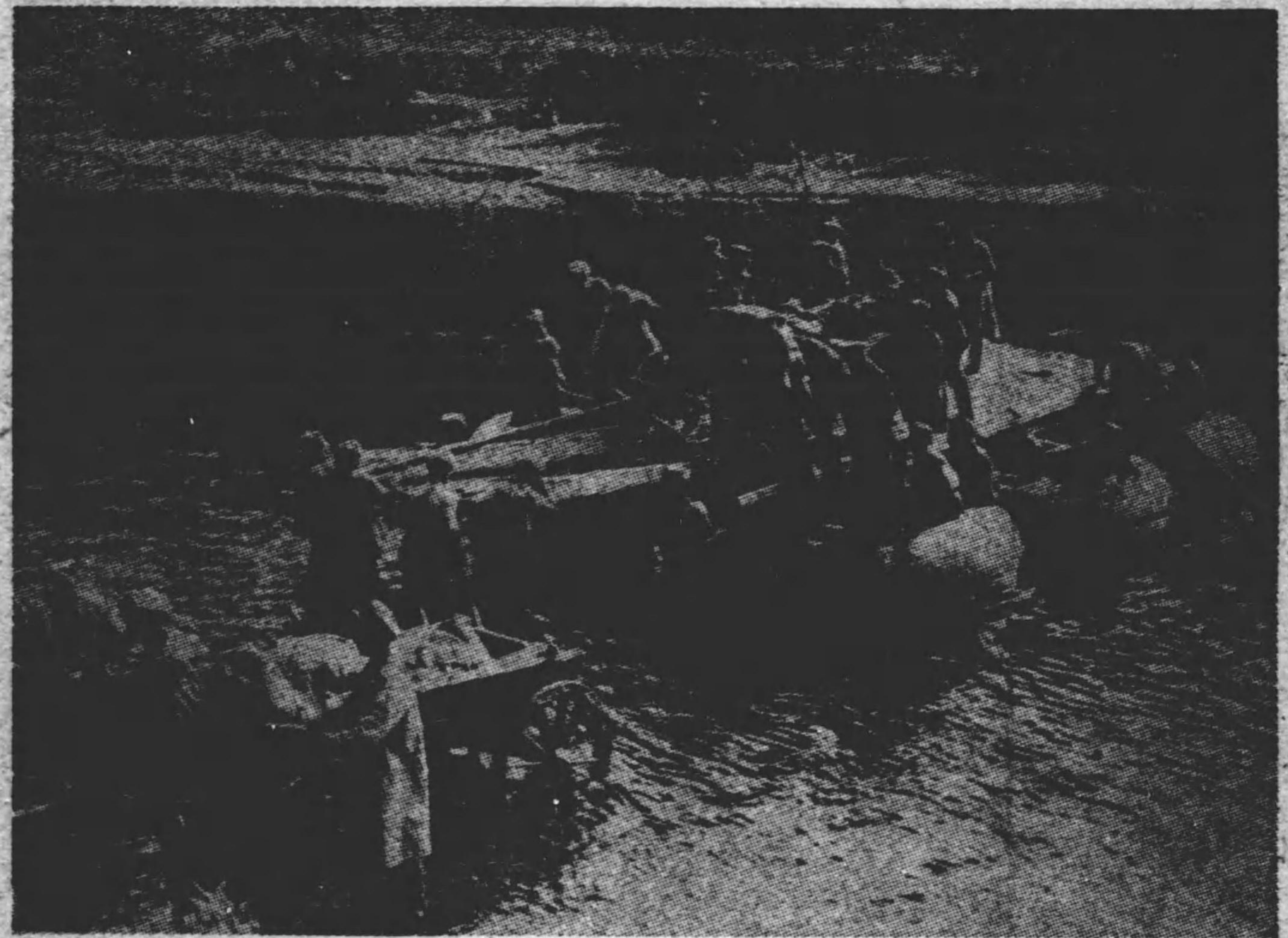
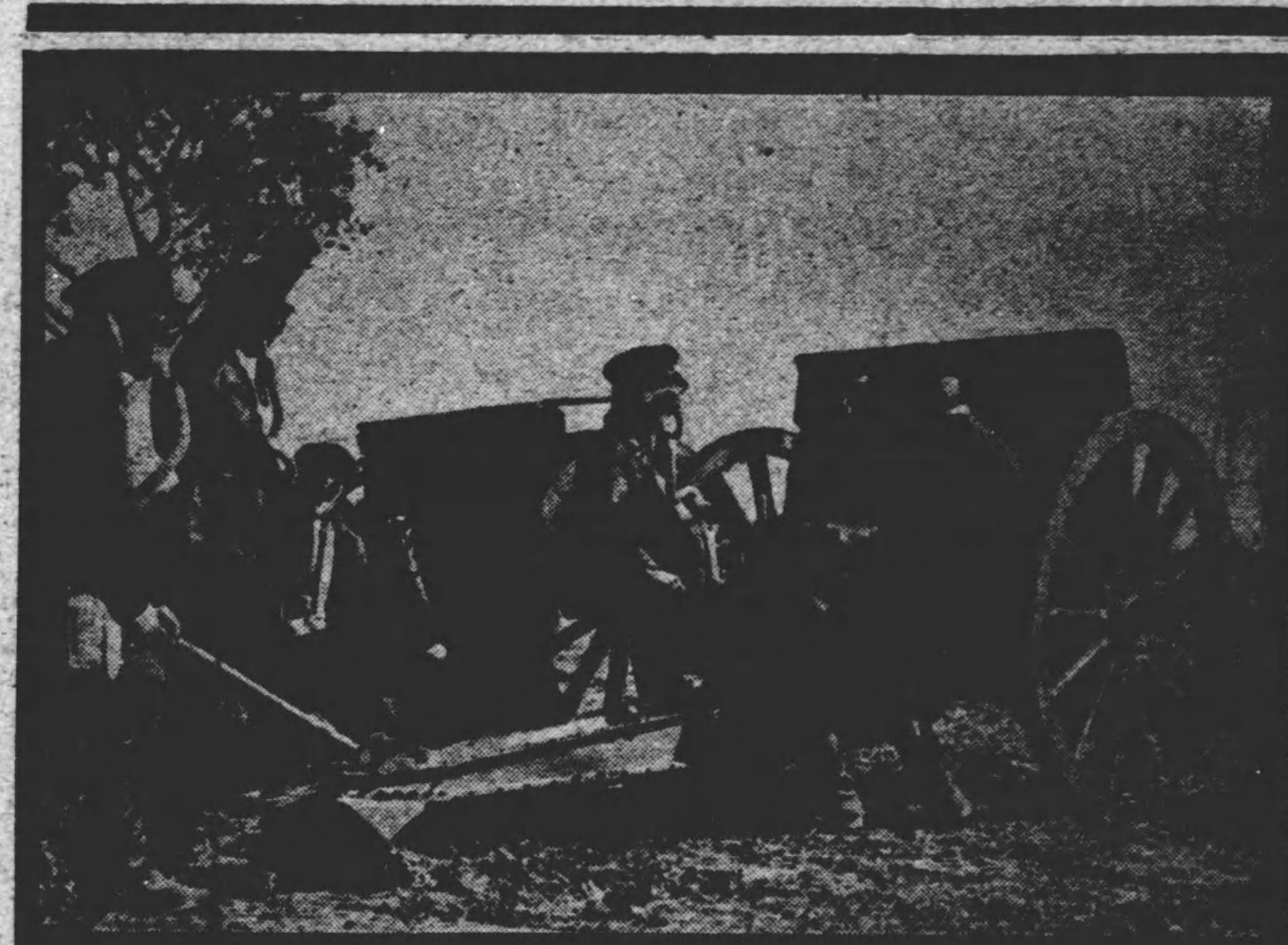


國洲滿。習演河渡るよにトーボムゴの軍赤（圖上頁右）

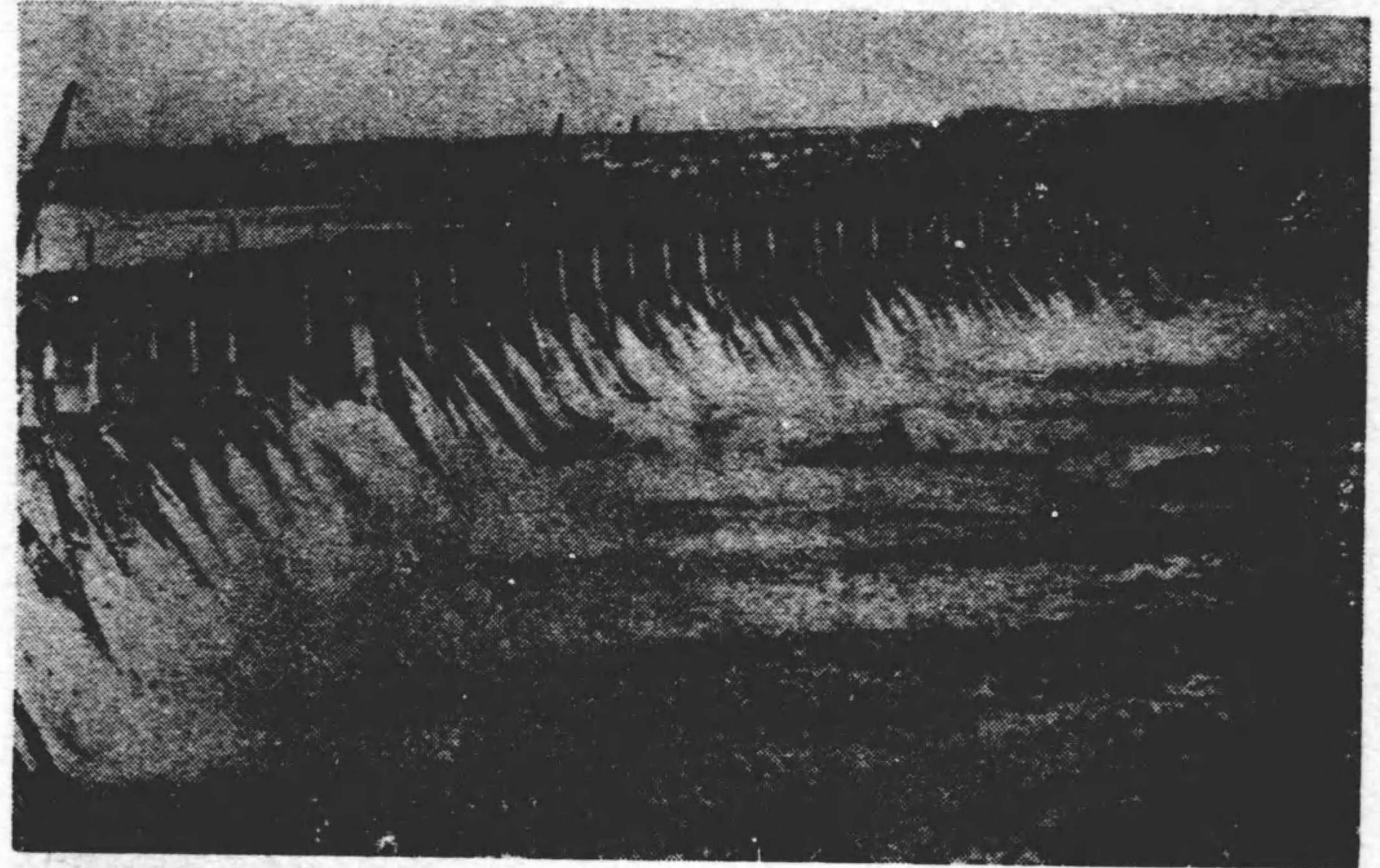
。るす要を意注はとこるあで河もれ何北、西、東の

隊兵砲野軍赤の裝クスマ（圖上頁左）

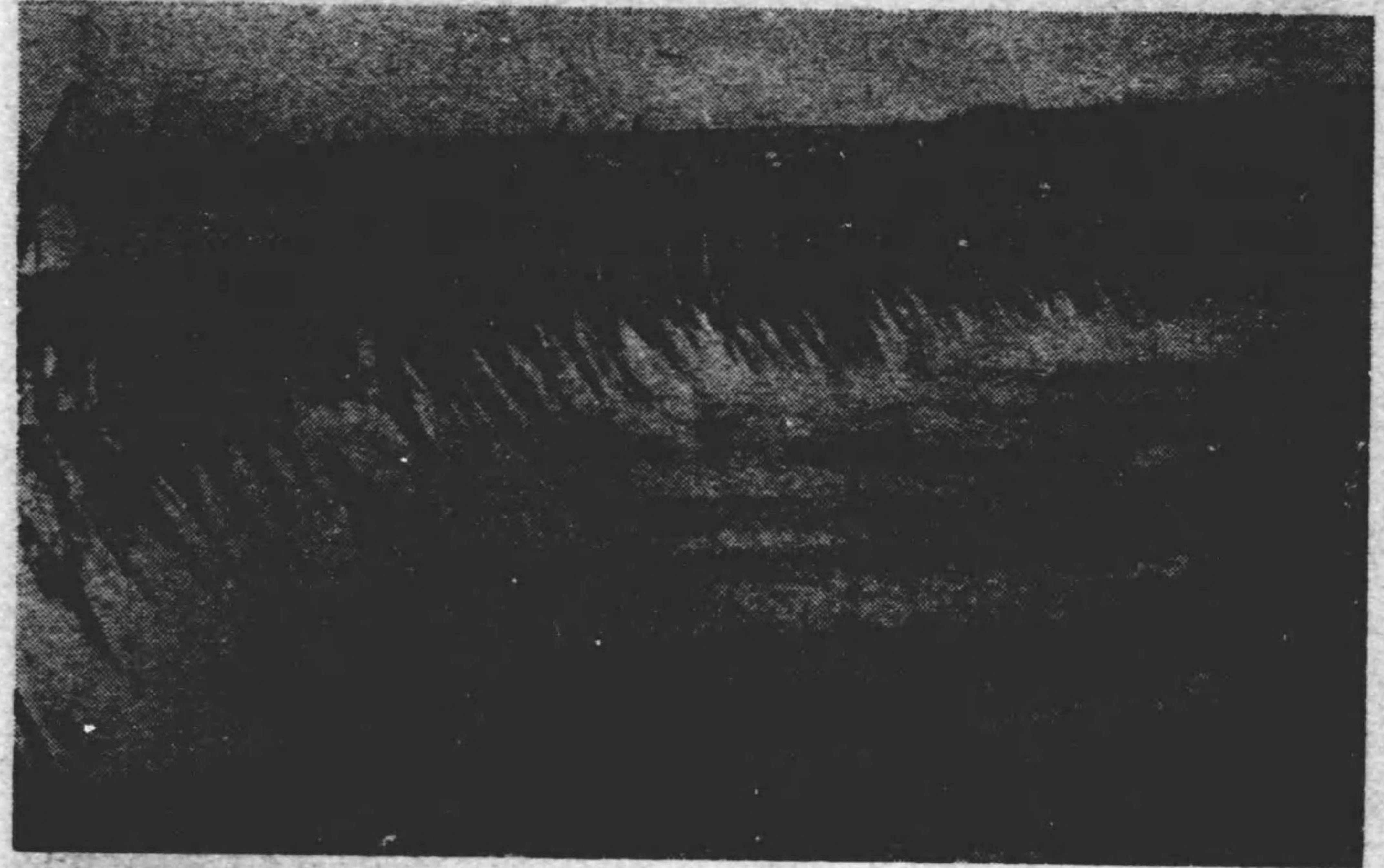
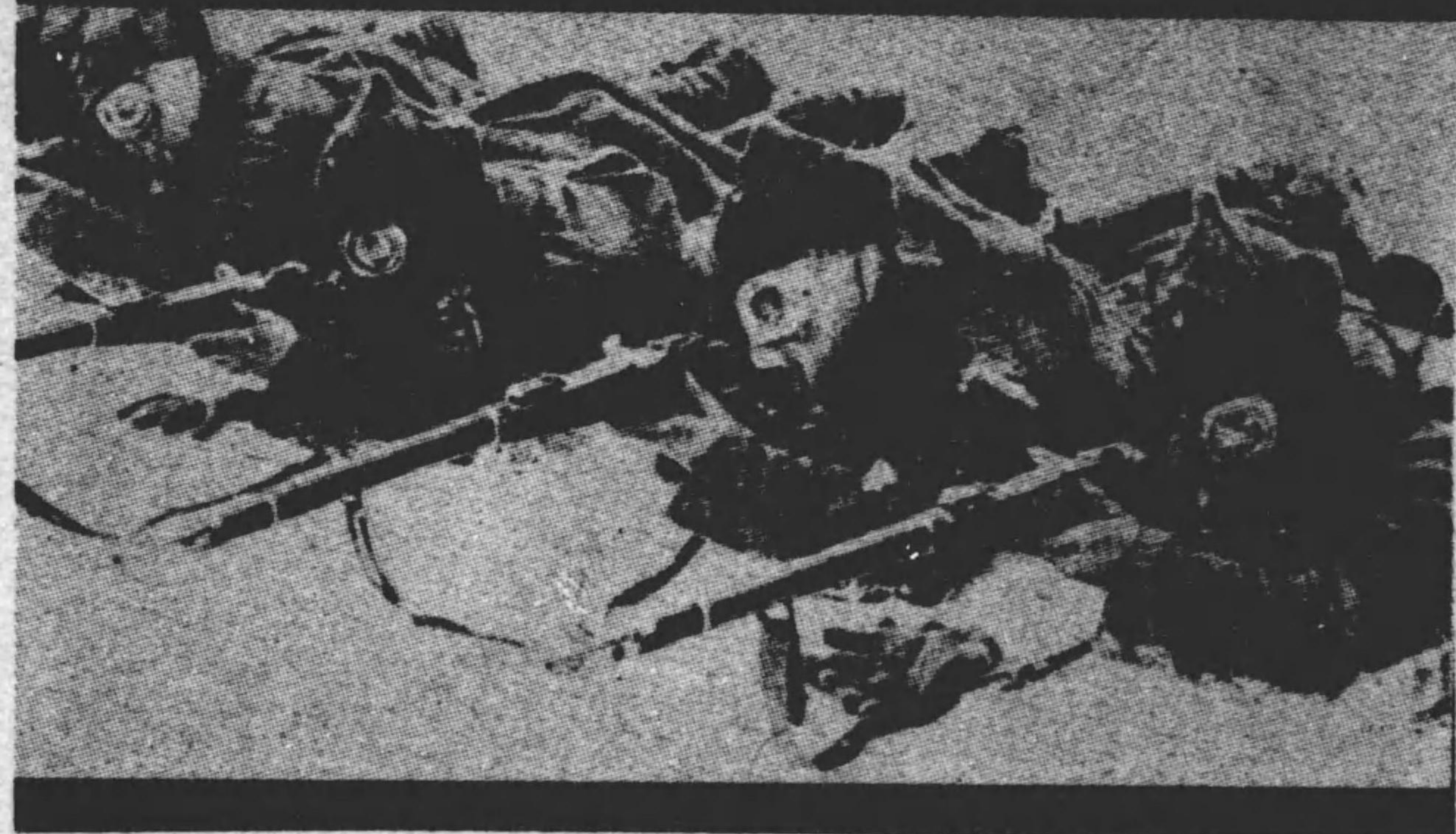
隊砲車動自軍赤（圖下頁左）



國洲滿。習演河渡るよにトーボムゴの軍赤（圖上頁右）
。るす要を意注はとこるあで河もれ何北。西。東の
隊兵砲野軍赤の装クスマ（圖上頁左）
隊砲車動自軍赤（圖下頁左）

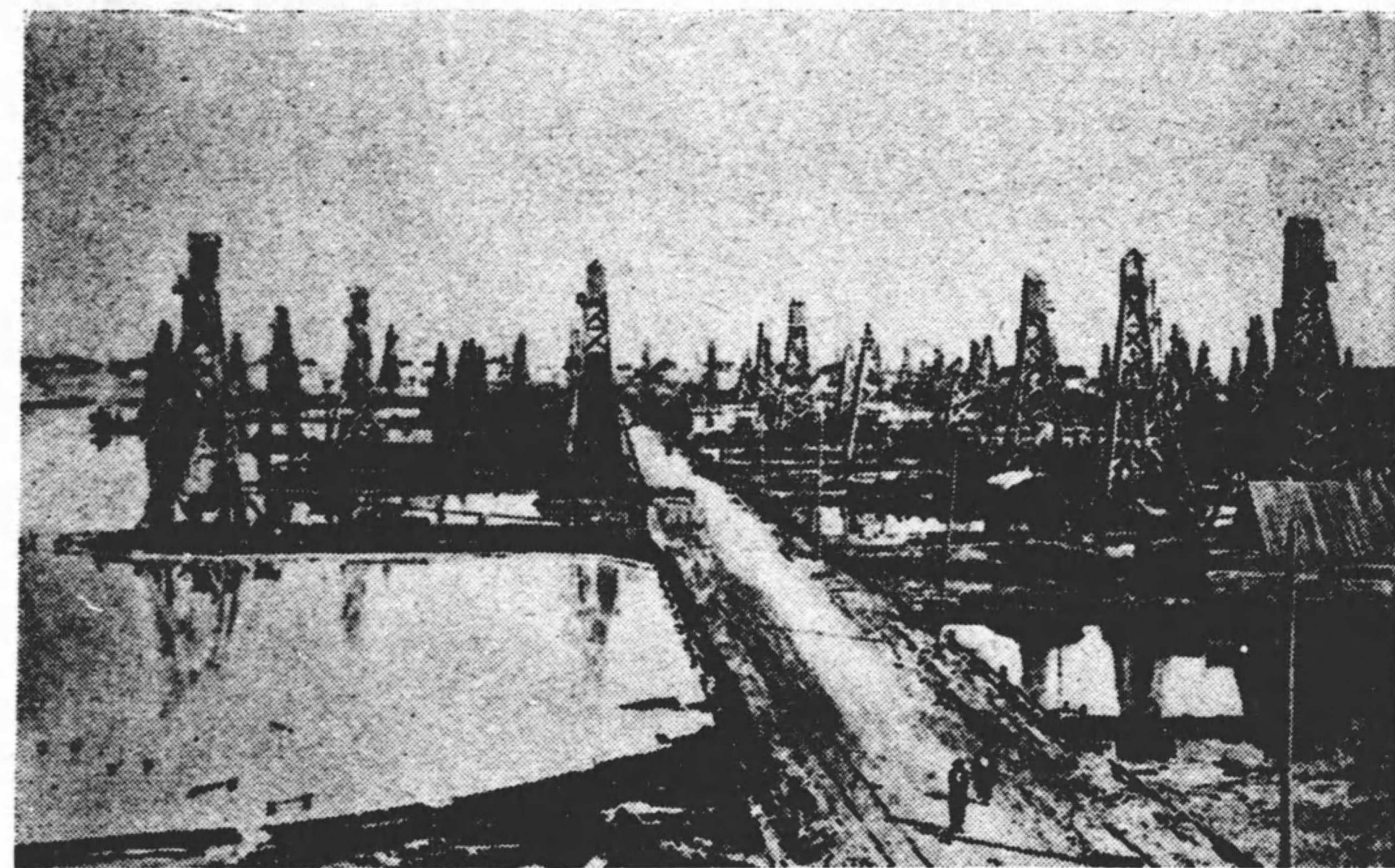


ルブーエニドの慢自も最中の畫計年ヶ五が國ソ (上圖右)
とんら作を所電發なき大とつもは國ソ近最。觀景の所電發
。るゐてし
す示をタスポたし調高を化強の備軍 (上圖左)
(練教)中雪の兵歩の軍赤たけつをクスマ (下圖左)

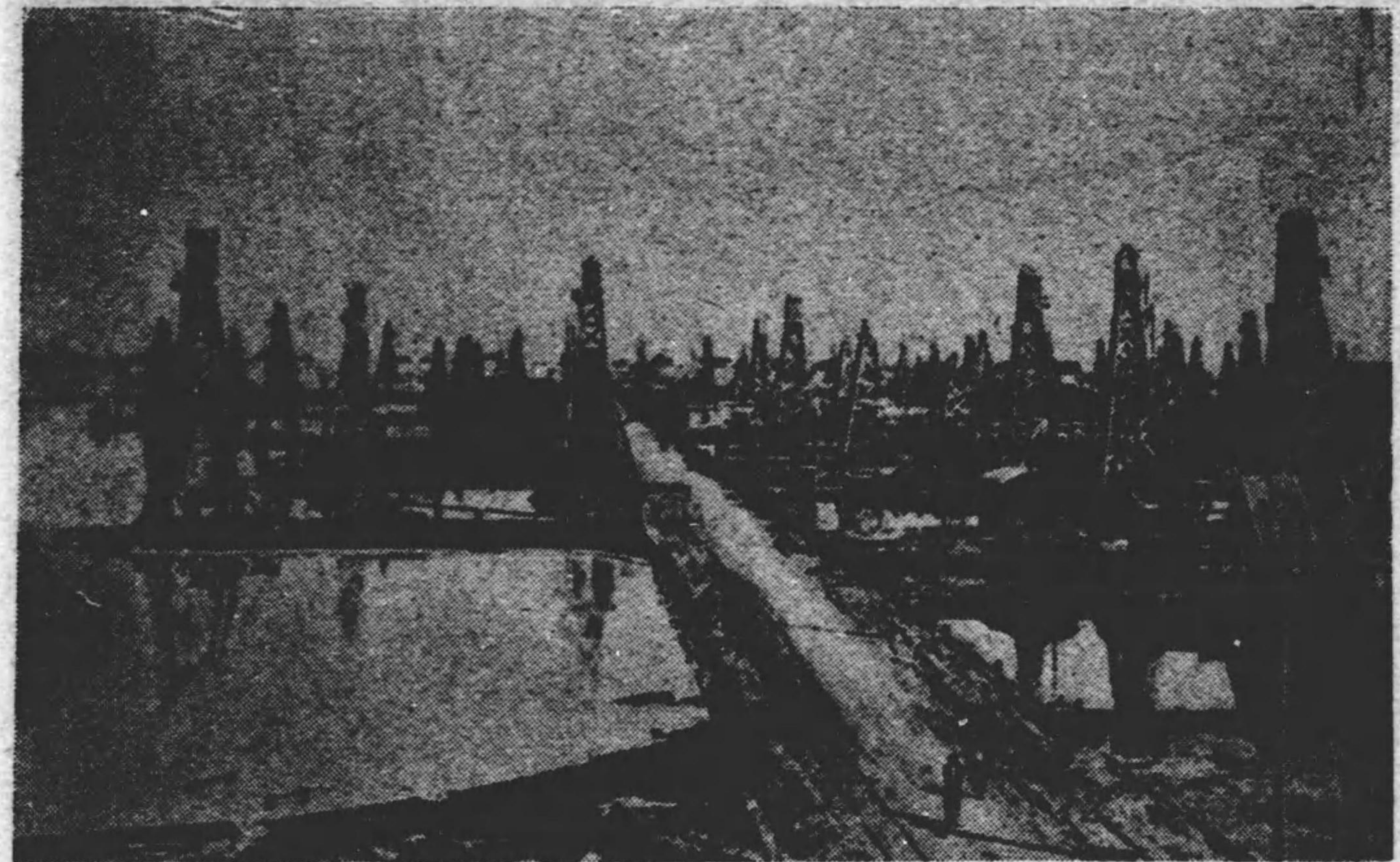


ルブーエニドの慢自も最中の畫計年ヶ五が國ソ (上圖右)
とんら作を所電發なき大とつもは國ソ近最。觀景の所電發
るゐてし

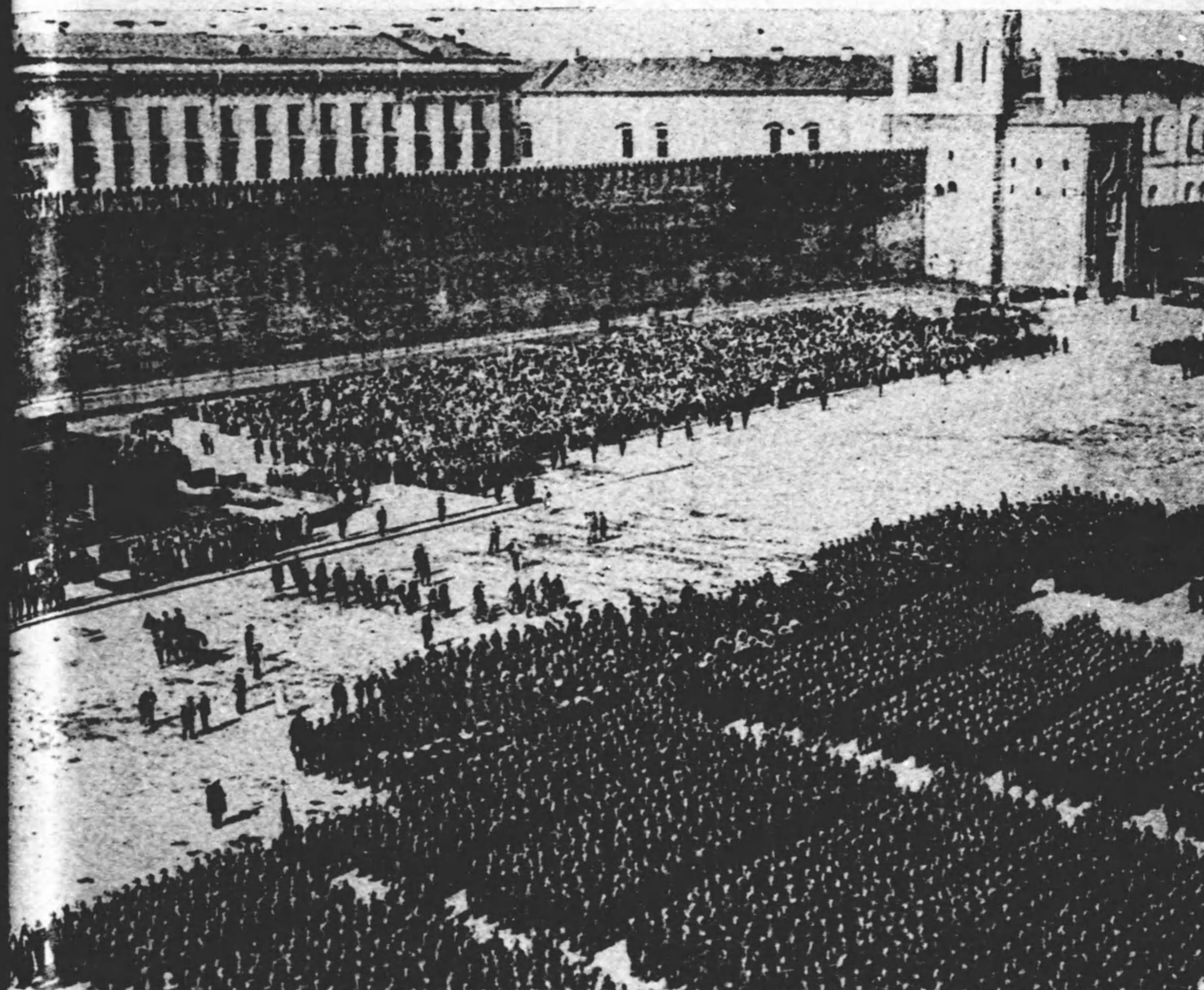
す示をタスポたし調高を化強の備軍 (上圖左)
(練教)中雪の兵歩の軍赤たけつをクスマ (下圖左)



大でま港の海黒らかいこ。観壯の坑油石一クバ（圖上）
來に國我近最。るれまこぎ注に船汽接直きひを管鐵なき
。るあでれこ皆は油露る
本日。機爆重超式TNAつ一の慢自御が國露（上圖左）
るあでれこはのるすとんは襲を地要主が我てえ越を海
軍進の隊砲兵騎（下圖左）



大でま港の海黒らかいこ。觀壯の坑油石一クバ（圖上）
來に國我近最。るれまこぎ注に船汽接直きひを管鐵なき
。るあでれこ皆は油露る
本日。機爆重超式TNAつ一の慢自御が國露（上圖左）
るあでれこはのるすとんは襲を地要主が我てえ越を海
軍進の隊砲兵騎（下圖左）



モスコ赤色廣場に於ける赤軍の觀兵式。赤軍は常備三百三萬あり
 兵數は世界一だ

危機に際して

一九三六年の危機が目前に迫つて来る。

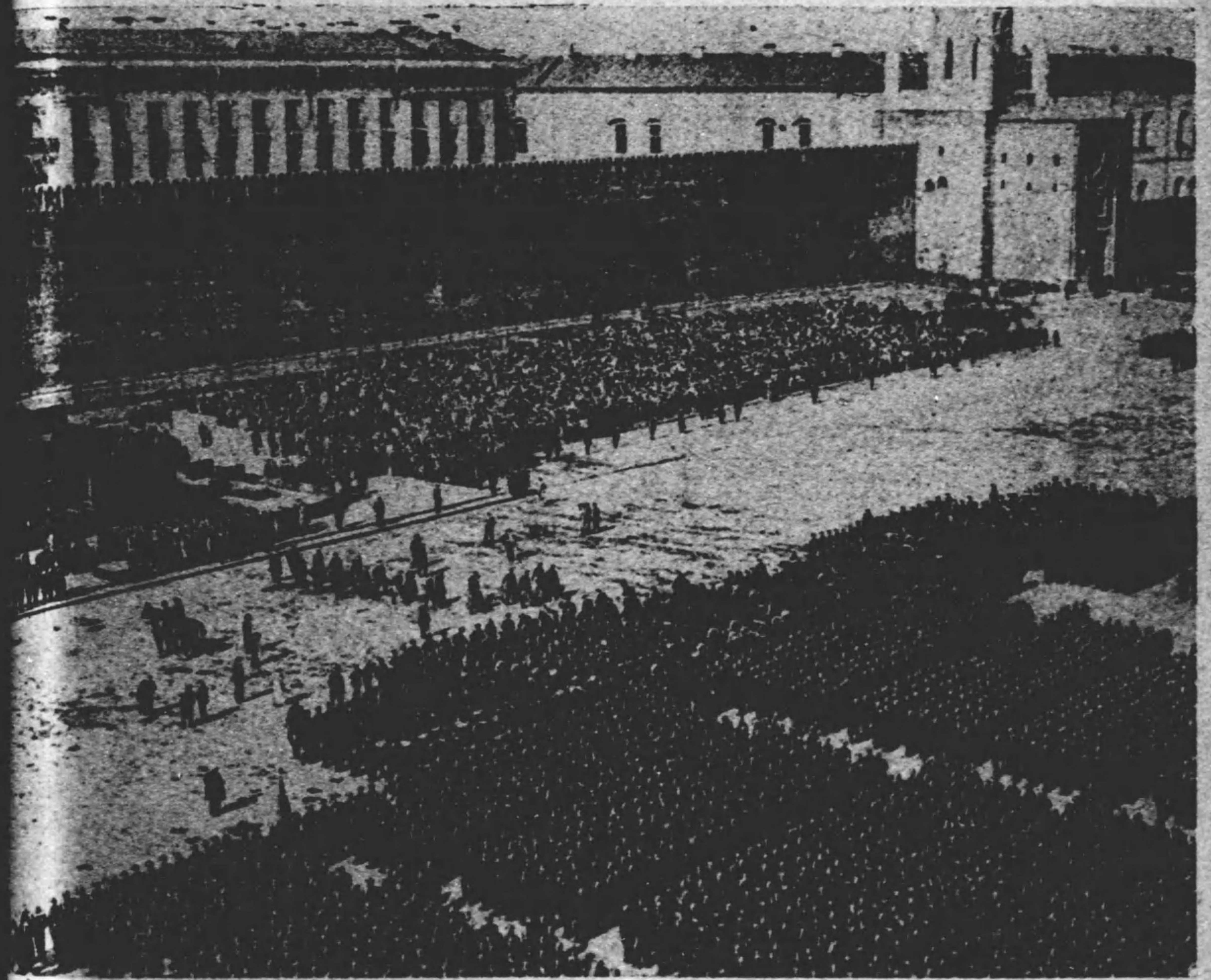
米露は握手して、米國は露國に、

露國は米國に我國を

たゝかせやうとしてゐる。

一九三六年、即ち昭和十一年を中心とする前後の二三年が日本にとって未曾有の危機と云はれるのはなぜであらうか。その理由は大體次のとおりである。

その一は昭和十年の海軍軍縮條約改訂會議に伴ふ危機であり、その二は昭和十年三月に於ける國際聯盟の正式脱退に依る滿洲國問題の蒸しかへしと、南洋委任統治諸島の沙還問題であり、その三はソヴェートロシヤの第二次の五箇年計畫完成の軍備強化に基づく、極東への積極的進出であり、その四は英國の大規模なシンガポール軍港の竣工による南方よりの脅威であり、その五は我が



りあ萬十三百備常は軍赤。式兵觀の軍赤るけ於に場廣色赤ーコスモ
だ一界世はで數兵

危機に際して

一九三六年の危機が目前に迫つて来る。

米露は握手して、米國は露國に、

露國は米國に我國を

たゝかせやうとしてゐる。

一九三六年、即ち昭和十一年を中心とする前後の二三年が日本にとつて未曾有の危機と云はれるのはなぜであらうか。その理由は大體次のとおりである。

その一は昭和十年の海軍軍縮條約改訂會議に伴ふ危機であり、その二は昭和十年三月に於ける國際聯盟の正式脱退に依る滿洲國問題の蒸しかへしと、南洋委任統治諸島の返還問題であり、その三はソヴェートロシアの第二次の五箇年計畫完成の軍備強化に基づく、極東への積極的進出であり、その四は英國の大規模なシンガポール軍港の竣工による南方よりの脅威であり、その五は我が

商品の世界市場への進出に對する各國の、露骨な壓迫である。

以上は今や一國となつて我國へ襲ひかゝらんとしてゐる。わけても米露の握手によつて露國は米國をして太平洋より、米國は露國をして大陸より、我國をたゞかんとしてゐる。

しかししてこの危機は我が國防線の鞏化によるの外防ぎ得ないのである。

全國民の團結によつて、相手に些かの乗すべき隙を與へずこれを突破し、未曾有の危機をして國運の躍進期ともなすことが出来たら幸ひである。

もとより彼等にして不純な野心を露骨にして挑戦して來れば東洋平和のため敢然立つだけの用意は忘れてはならぬことは勿論である。

ともあれ

備へあれば憂ひなし

備ふるものに榮えあり

との標語を提示して、全國民一致、この危機の突破に全力をつくしたい。

一九二六年と赤露の脅威

日ソ關係の検討

露國の極東政策

ロシアが極東に、その勢力を扶植しやうとしてゐることは、ペートル大帝以來の傳統的宿志であつて、現ソヴェート聯邦となつても少しも變るところがないのみか、ソ聯邦建設者であるところのレーニンは、

「吾人の運命は東方に於て決す」

とまで遺言して死んでゐるのである。

ロシアは帝政時代シベリヤを経て、當時、支那領土であつた沿海州を奪ひ取り、浦鹽に港を開い

たが、此處が冬季凍結のため用をなさないことを知ると、更に滿洲への進出を企てた。

我國は明治二十七年の日清戦争の勝利によつて遼東半島を得たのであるが、これは間もなく露國を始め獨逸、佛蘭西のいはゆる三國干渉によつて、清國に還附せしめられたのである。

當時我國は日清戦役直後でもあり、國力まだ十分でなかつたので、涙を吞んでこれを手離すのやむなきに至つた。ところが間もなく露國は、この遼東半島を一兵も使はず、ほんとの外交の口先のみで手に入れ、これに大連、旅順等の港を設けて不凍港を得る目的を達したのである。

その後露西亞の魔手は南北滿洲はおろか朝鮮にまで延び、我國の存立を危ふくするに至つたので、我國は敢然立つてこれと戦つた。これが日露戦争である。

この戦役に我國は十餘萬の生靈と二十餘億圓の國帑を犠牲としてこの結果樺太の南半分と、南滿洲に於る鐵道その他の利權及び遼東半島の租借權を得た。日露戦争後、露國は歐洲方面に於いて世界大戦への参戦や隣國との葛藤、國內の革命騒ぎが打續いてゐたため、極東方面を顧みる暇がなかつたのであるが、レーニン、トロツキー等の手に依つて、ソヴェート聯邦政府が成立するに及

び、約十年にして國內の状態は大戦前と大體同様になり、更に第一次五ヶ年計畫を立て、國內の工業化を圖り、今や第二次五ヶ年計畫によつて農工業、軍備等の整備、發達著々と實現し、更に目下努力しつつあるのである。

日滿ソの関係

ソヴェートロシヤが滿洲事變中にとつた態度はどうであつたかと云ふに、表面は中立の態度を保持してゐたので、チ、ハル、ハルビン、コロンバイルの戦鬪に於ても幸ひ事なきを得た。尤もこれには我が關東軍が慎重な態度をとつてゐた事もその一つの理由であるが、露國も國內の事情から手が出せなかつたと見るのが至當であらう。由來北滿の地はソヴェートロシヤの勢力範圍内であつて、目下問題となつてゐる北滿鐵道の如きも露滿共營といふのは名ばかりで、その實權を握る幹部は恰んどソ國人(以下露國を)であり、昭和四年以來特にその權力は加はつた。

而してこの北滿鐵道の延長は、丁度内地の青森から下關までに匹敵する長い線であつて、滿洲國

主權の確立と共に従來の露支協定は當然引繼がれて、經營にも折半的權利を有してゐるに拘らずソ國側の幹部は事毎に専横の處置が多く、米國製の優秀機關車九十輛、及び客車、貨車等併せて約三千六百輛といふものを、自國內に引入れたまゝ返還しないのである。これが返還を要求するのは滿洲國側としては當然であるが、ソ國側では自國の財産であることを主張し、この要求に應じないものである。

この外、主權國である滿洲國が運賃國幣建、實權の均等化等の當然の要求をしてもこれに眞面目に取合はないのみか、前述のやうな車輛盜送といふやうな不正な事件があるので、ハルビンに於けるソ國側幹部職員並に滿洲里、ボクラニイチナヤ驛長の召還取調べとなつた。

更にこの長い北滿鐵道は目下のところ、滿洲に於けるソ國側の有力な足場として赤化宣傳の根據となつてゐるのである。皇軍の將兵が屢々、輸送中、列車轉覆事件のため死傷者を出して居るのも背後にはこうした赤化的活動があるのである。

しかしながら日滿提携による滿洲國の健全なる發達はソ國側をして、著しく不安の念を増大せし

めたことは勿論で、北滿鐵道讓渡の意志を表示して來た。しかしこれも一説にはこの讓渡價をなすべく高額にしてこれを國內五ヶ年計畫の充實に充てるとの話もある。東京に於ける北滿鐵道讓渡會議は價格見積の相違その他の問題で目下停頓中である。

そもそもソ滿國境線は蜿蜒九百里の長きに亘つてゐるのであつて、この國境線が大小各種の事件を起してゐる事は止むを得ない事である。即ち日本内地のやうな海國と違つて、地續きに外國を控へてゐるのであるから、逃亡、密輸入といふやうな不心得者は、一年中繰り返されて居り、又それをよい口實にして、滿洲國內を不法に射撃するのである。

これは歐洲諸國間に於てさへ屢々ある事であるが、特にソ滿國境に於ては白系露人、又は勞農政府の壓迫に堪えかねて逃亡して來る者、或は不正入國即ち、密輸入の目的の下に入つて來る者が、ソ國の國境監視隊即ち(ゲ・ベ・ウ)の手にかゝつて銃殺されるので、その人數は小さな町に於ても一年間に數十人を算するとの事である。

又滿洲國側としては僅かにその主要接觸地帯である、滿洲里、三河と黒河、ボクラニイチナヤに

のみ國境警察隊がゐるのに拘はらず、ソ國側は國境線至る所に監視隊がゐるのであつて、若しも滿洲國側へ侵入し暴虐を働くとしてもこれは易々たる事なのである。

最近に於けるゲ・ペ・ウの滿洲國部落襲撃等はこの一例であつて、その外暗夜に乗じて滿洲國側に侵入、地勢、森林の状態を探知して、開戦の場合に備へつゝあるのである。

ソ國の極東赤化運動

ソ國は現在どんな工合に、レーニンの遺言を實行し、極東方面に赤化の魔手を伸ばしつゝあるであらうか。これを検討して見ることは時節柄大いに意義があるのである。あながち、ソ國軍隊ばかりが我等の敵ではない。その赤化的魔手こそは人體を腐爛せしめるリペリットの毒瓦斯よりも、熱度四千度を有するテルミット弾よりも、恐るべきもので、これがため戦争の最大要素である國民精神を麻痺破壊されて、背後よりの崩潰せられるに至るのである。

ソ國の極東赤化運動は如何かといふに、高架索、中央亞細亞は云ふに及ばず、廣大なる外蒙古の

如きも、殆んどソ國の屬領と同様であつて、外蒙古共和國となつて居り、アフガニスタン、西藏方面でも英國の勢力を駆逐し、更に印度二億の大衆にも呼びかけて、英本國との離間を圖り著々赤化の戦線を進めてゐるのである。

又北京から千五百里もあり、これに達する唯一の交通機關は馬であるといふ廣大な新疆省に對しても、その接觸地帯にトルキスタン鐵道を敷設すると共に、赤色侵略を敢行してゐるのであるであつてその勢は侮るべからざるものがある。

最近報するところによると、蘇炳文、李杜等の滿洲事變の際、ソ領に遁入した支那兵三千人をトムスクに於て赤化教育を施し、これを先頭に立たせて、進略せしめてゐるとの事である。今や新疆は第二の外蒙古として、ソ國の勢力範圍となりつゝある。

更に赤化の魔手は甘肅に及び、江蘇省を経て支那本部にも及んでゐるのである。

即ちソヴェート現政權と一心同體である第三インターナショナルの支部は上海に設けられ、支那本部に於て一九二六年には約二三萬に過ぎなかつた共產軍は今や約三十五萬人の多きに達し、支那

中央部では湖北、湖南、甘肅等約十省はソヴェート區域となり、江西省の共産軍は福建省にも進入した。

又四川省も危いといふので、蔣介石は六十萬の大軍を率ひてこれを討伐してゐるが、その成功は困難と見られてゐる。

最近の報道によると江西の共産軍はこの頃獨立を宣言した福建の新政權と結託して、一層その勢力を増大せんとしてゐる。

支那の福建と云つてもピンと來ないが、我が臺灣とは目と鼻の對岸である。

又北支那方面では、蒙古から察哈爾を経て、例の馮玉祥を通じて張家口あたりまで赤化の手がさし伸ばされんとしてゐる。

一體支那に於る赤化運動は約十年前、ソ國のカラハン及びボロチンが支那に來て指導したもので、特にボロチンが廣東に於て、共産黨式の軍事教育を施した事が、今日の原因となつた。その後ボロチン等の歸國と共に一時火の手はおさまつたかのやうに見えたが、當地の生徒によつてこの時

の芽が今各地に盛んに萌えつゝあるのである。

このボロチンこそは今ソ國極東軍司令官として、「日本何者ぞ」と頻りに對日強硬氣勢を擧げてゐる、ブリュツヘル將軍その人の假の名であつたのである。

ソ國が歐羅巴の英、佛、伊、獨等に於てなした、赤化運動は各國の峻嚴な擊退に會つて、手も足も出ずになり、仕方なくその銳鋒を近東のトルコ、ベルシヤ、アフガニスタン、印度より更に極東方面に轉じて來たのであつた。

極東に於ける、この赤化の矢表に立ち得るものは我國を於て他にないのであつて、この點歐羅巴方面に於ては數箇の強國が對抗したのと違つて、我國のその責務は極めて重大なのである。

ソ國の軍備擴張と極東の戦備

ソ國の第一次産業五ヶ年が工業化に重點を置いてゐた事は、軍備の充實に役立ち、一名を軍事五ヶ年計畫とも云はれるのであつて、現に自動車、トラクターの如きも一日によく百臺以上製作能力のある工場を有するとの事で、これ等が一朝開戦の場合軍用に早變りすることは勿論である。特に

チエリアピンスク工場で出来るアヒル型のトラクターはタンクとしての性能を立派に具備してゐるとの事である。又飛行機の如きも従前は外國から買入れてゐたのが、今では、A.N.T式の如き自國産の優秀機がどん／＼出来るやうになつて、つい最近も百二十八人乗といふ恐ろしく大きな飛行機が墜落した事を傳へてゐるが、これなど世界稀に見る大きなものである。

今や第二次五ヶ年計畫を鋭意進行中であつて、これは昭和十二年には遂行せられる事となつてゐるが、その結果軍備は一層機械化し、鞏化擴張せられる事となるのである。

最近も、國民が食ふや食はずで苦しんで居り、ウクライナ地方の飢饉の如き大被害があるに拘らず、いはゆる鐵の規律を以て、一向にお備ひなくどし／＼大規模の軍事擴張を斷行し、昨年度に於ても歩兵四箇師團、騎兵一箇師團の増設を行ひ、飛行機の如きも晝夜兼行で製作増加し、毒ガスの研究と製作とは米國と相競ふ盛んさで、化學戰部隊は凡ての軍團に配置せられてゐる。現在の總兵力七十六箇師團、飛行機二千二百臺、戰車一千六百臺と見られてゐるのであるが、斯くの如き軍備の擴張強化は何の目的に使用せらるゝのであらうか。恐らく「強大なる軍備の力を以て世界赤化の

目的を達せん」といふ意圖にある事は勿論であつて、第二次五ヶ年計畫の遂行によつて國內の整備が完成した上は當然この目標への突進となつて現れて來るであらう。

ソ國が滿洲事變以來極東に集中した兵力は約十一萬人（十數箇師團）と目せられてゐる。我が日本帝國平時の兵力が二十三萬人であることを考へると、この約半數に等しい軍隊が滿洲國の周圍を包圍してゐることとなるのである。

この外、飛行機も約三百臺、戰車が約三百臺配置されてゐるのである。この中には超重爆撃機が數十臺用意せられてゐるのであつて、この超重爆撃機は約七トンの爆弾を積載し得るとの事である。三トンの焼夷弾が風の日に東京へ撒かれると、かの大正大震災の時のやうな惨害を與へ得る力のあることを知るとき、如何に威力が大であるか想像出来る。而してその航續距離は一千五百キロに及ぶとの事で、これを浦鹽東京間が千キロの距離、往復二千キロであることを知るなれば、臺灣を除く日本全土はその猛害を蒙むる行動範圍下にあることになるのである。

この外吉林省東部國境、黒河對岸、黒龍、松花兩江の合流地點、滿洲里等には永久的な築城をなし、最近は日露戦争後手を入れた事のない浦鹽の砲臺を改修しつゝあるのである。

これに對する一挿話として、日本からこの兩三年對露的に多量輸出せられてゐた、セメントが、皆築城の材料になつてゐたなどといふ事で、最近漸く氣づいて中止したなどといふ話もある。潜水艇も陸路輸送され、既に六隻は完成し、後數隻は目下急に組立中であるとの事である。

この潜水艇の威力たるやよく通商貿易及び海上軍事輸送線を脅威するに十分であつて、世界大戰當時一、二隻の獨逸潜水艇が現れても、その犠牲が多きく、且つ多數の護衛軍艦を必要とした事でも判る。若しも事ある場合この潜水艇が日本海はおろか、太平洋方面へでも、出沒するやうな事になると、わが貿易線は脅されてそれこそ大變である。この外ドックを改修するとか、極東の都市には防空、防毒演習を行ふとか積極的な準備を進めてゐるのである。

又シベリヤ鐵道の復線工事を急ぎ、又南方併行線をつくり、バイカル迂回鐵道を計畫し、イルク一クまで來てゐた航空線をウラチオまで、延長し極東方面の軍事輸送能力に萬善を期してゐるので

あつて、そのやり方は極めて大仕掛である。

極東の戦時に備へるために毎年數萬の除隊兵をソ滿國境に送り、共營農場を營ませて、警戒を嚴にし、いはゆる武装移民としたのである。同時にこれまで國境附近にあつた農民を、強制的に後方へ移住せしめた。

この外從來ドン河の流域にあつた工業中心地帯を漸次ウラル以東のチエリアピンスク及びスウエルドロフスクに移しつゝある事も、一朝極東に事ある場合の用意と見る事が出来る。

以上の如くソ國は極東方面に積極的軍備擴張をして居り若しも我が日滿兩國の連繫に些かの弛みでもある時はその弱點を衝いて來らんとしつゝあるのである。

特に西歐羅巴方面に於て關係諸國と不可侵條約又はこれに等しい條約を締結し、又最近米國との復交を見るに及んでその鼻息は一層荒いのであつて、過ぐる十一月六日のモスコの革命記念式に於ても、ソ國の首相モロトフは豪語して曰く、

「今や赤軍は對日本戦争に於て必勝の準備あり」と述べてゐる。

又本年一月事實上の主権者スターリンは「鞏化せる赤軍の矢表に立ち得る何れの國の軍隊ありや」と呼號してゐる。これは二三年前であつたならば或は恐日にもとづく惘惘とも見る事が出来るが、現在では相當の實力を有し、しかも歐洲諸國との危機が解消せられた有利な立場にある以上、或ひはその勢ひに乗じて、進んで自ら提唱してゐた不侵略主義を擲ち、敢へて他國攻略策をとるに至るかも知れないのである。これは子供が切れる刃物を持つと無暗にこれを使つて見たい衝動に驅られるのと同じである。

事實上の権力者スターリンは、その掌中に軍隊と警察を兼ねたやうなゲ・ベ・ウ十五萬をしつかり握つて、牢固として抜くべからざる實力を有してゐる。泣く子もその名を聞けば黙るといふゲ・ベ・ウに一度睨まれたが最後、何人と雖もどうすることも出来ないのである、彼のトロツキー、ブハーリン、ルイコフ等の最有力者の失墜はこれを裏書して餘りあり、現在事實上陰口一つきく事が出来ない。又最近に於ても黨内の反ソヴェット分子の大掃蕩を行ひ、今やスターリンの威令天下に偏く、その計畫は善惡を問はずどしく實行せられてゐるのである。

最近に於けるウクライナの飢饉の如き夥しい犠牲者を生じたのに拘らず、不平分子をビタリと抑えると共に一方には大工事を進めて、北緯では白海とバルチック海を通ずる大運河が開通し、更に世界第一を誇る、ドニエール発電所に優る新發電所を目論み中との事である。なほこの大運河開掘には囚人が主として使用されたとの事である。

こゝで一才囚人の事を述べるが、刑務所内の作業等も主として軍用品が多く、しかも八時間交代による晝夜兼行であつて、一時間に五分の休みしか與へないので用便にも不自由だとの事であつて競争的に仕上げ高をつりあげる方法をとつてゐる。

この仕上競争制度は何れの事業にも行はれ、毎日成績を公表し豫定以上の能率を挙げたものには稱讚激勵を與へるのである。この制度は工業方面ばかりでもなく、ソ國の國家的活動の原動力ともなつてゐる、鐵及び石炭の採掘にも適用せられてゐるのである。事實映畫等によつて見ても炭坑内の労働者は血眼で働いてゐて、よくもあれで精力が續くと思はれる程である。而して工場労働者はタツタ一日の缺勤、遅刻三回でくびになるとの事である。

斯くの如く自由あつて自由なきが如く、精神的な獎勵のみによる制度に反感を有するものも少く

ないことは事實である。又國內の大半を占むる農民中にも、農業の公營化、集團化に反對する聲が多く、種々の物質も國內で充分生産されながら、五ヶ年計畫の資金欲しさの無理な輸出によつて缺乏してゐた事も事實である。最近の歸朝者の話にビフテキ一つが日本貨で三十五圓大根一本一圓とられたとの事である。

ソ國の政府はこれを我慢させ、國內に充滿した不平不満を抑へるためにも強力な軍備が必要なのである。

即ちそれに萬一外國と戦端を開き、敗けるやうな事があると不平分子の擡頭となり、國內の動搖を來すので彼等は軍備をあらん限りの力によつて鞏化し、意地にも負けられない立場にある。

又過ぐる滿洲事變中の對日強硬論者は特にその軍部ともいふべき、赤軍最高級司令官ウオロシロフ將軍であり、前述の極東軍司令官ブリユツヘル將軍であつたといふ話は、如何に彼の軍部が自信？を抱いてゐるかがよく判る。

而もその軍隊は勤勞者のみを以て組織し、その多くは數度の革命戰、銃火の洗禮を受けた古強者であるのである。

その兵員の素質は朴訥、鈍重、特に防禦に於ては命ぜられた場所は死ぬまで、守るといふ性質を有してゐるので、守備にかけては世界一であらうと云はれてゐる。

兩三年前までは機動戰に不得手であり、指揮官の素質如何が論ぜられたが、今日に於てはこれ等の缺點は補はれ、侮り難い一大勢力を形づくつてゐるものと推察される。

兵器に於ては前に述べたが如く五ヶ年計畫の工業化に伴つて進歩し、タンク及び飛行機の大量生産が實現せられると共に、機關銃、自動拳銃も火炮等も優秀なものが製作されるやうになつた。

兵制中特に機械化せる騎兵集團に重きを於て居る事も特筆すべき事である。

ソ國は將來の戰爭は軍事の外經濟戰、思想戰にあると稱して居り、特に思想戰に重きを置き敵國の後方攪亂に現政權と不可分の關係にある、第三インターナショナルをして活躍せしめてゐるのである。滿洲事變中にもこの徴候があつた。我々はかゝる内通的不純分子は平時戰時を問はず、根絶しなくてはならない。

三〇
先年支那がソ國北京大使館に手を入れた際、彼等が支那の共産軍に對して供給した、或一年間の兵器は次の通りであつたと云はれる。

飛行機	三臺
火砲	三八門
機關銃	一四七基
小銃	二六、五〇〇銃

の多きに達して居り、指導者として

高級指揮官	五人
各兵器指揮官	四十六人
司令部員	十一人
政治勤務員その他	二十人
合計	八十二人

が潜在して支那赤化の尻押しをしてゐた事實もあつたのである。

かゝる實例を見る時、如何に巧妙なる赤化運動の助長方針が相手國に向つてとられてゐるかといふことを知り得る。

斯くの如くであるから、我が對滿政策は確固不拔な方針の下に、行はれなくてはならぬ。若しも少しの弛みでも出来れば乗ぜられる恐れがあるのであつて、その堅固なる事を知つて、齒が立たないと見ると彼等は積極的な進出を、次第に斷念し他方面に轉換するに至るのである。これはソ國のこれまでの實際に徴しても明らかである。

滿洲國の治安と皇軍の活動

最近滿洲國の治安が著しく良くなつて、皇軍に對する心からなる感謝の聲が、滿洲國人の間に擧つてゐる。

即ち昭和七年秋に於ては二十一萬餘を算した、兵匪、土匪が、昭和八年六月の發表によると、約六萬人に激減してゐる、尤も巨賊の數は高粱繁茂期である夏季に於ては増加するのが例である。又

南滿鐵沿線の如きは恰んど平靜に治安が維持されてゐるのである。

而して滿洲國は我が國の二倍半にも及ぶ廣大なる地域であつて、この廣範圍の警備に當つてゐる皇軍は、僅々二三の師團に過ぎず、行動に困難な未開の山野が多いのでその困苦は推察に難くない。而も夏季に於ては時に百四十度に達する酷暑と闘ひ、冬季に於ては零下四五十度といふ内地に於ては想像の出来ない嚴寒に打ち堪えて不眠不休、しかも一言一句の不平等も洩らさず警備に當つてゐるのであるから我々國民は深い感謝を捧げなくてはならない。近來滿洲事變當時に引替へ第一線の將士慰問の實があがつてゐないやうに見受けられるのは誠に遺憾である。

日ソ若し戦はゞ

今や我國は國を擧げて滿洲國の開發に努力してゐるのであつて、出先の當事者に於ても、茲十年位は専心にこれに當るべきものと觀られて居り、我國からソ國に進んで事を構へる等の野心のない事は勿論である。

随つてソ國側の發表する怪文書事件であるとか、日軍飛行機のソ領侵入とか、日本驅逐艦二隻の

撃沈とか、根も葉もない虚報が誠にやかに傳へられてゐるが、これは一體ソ國側の國內策であるか、恐日に基づくものか、侮日に基づくものかはよくわからないが、ソ國側幹部の鼻息が最近頗みに荒くなつたことは事實である。

もしもこの鼻息が、鼻息だけでなく、腕まくりとなつて、先方から打ちかゝつてくるやうな事になれば我軍もやむなく立たなくてはならない。

重ねて云ふが、戦争は國を擧げての重大事で輕々しくこれに動くべきでなく、まして我が帝國が世界の平和を愛好し正義に基づく政策を實行しつゝある現在に於て、好んで他國を侵すやうな事のない事は勿論である。

以上でソ國の極東政策の概略を述べたが、これが前述のやうな萬一、ソ國の不法的侵略となり、兩國の開戦が起つたと想定した場合兩軍の行動はどうなるであらうか。ソ國は急速に相手方へ侵入せんとするであらう。現に赤軍の總司令官ウオロシロフ將軍が「吾人は他國境線外に於てのみ戦ふ」と明らかに宣言してゐる。

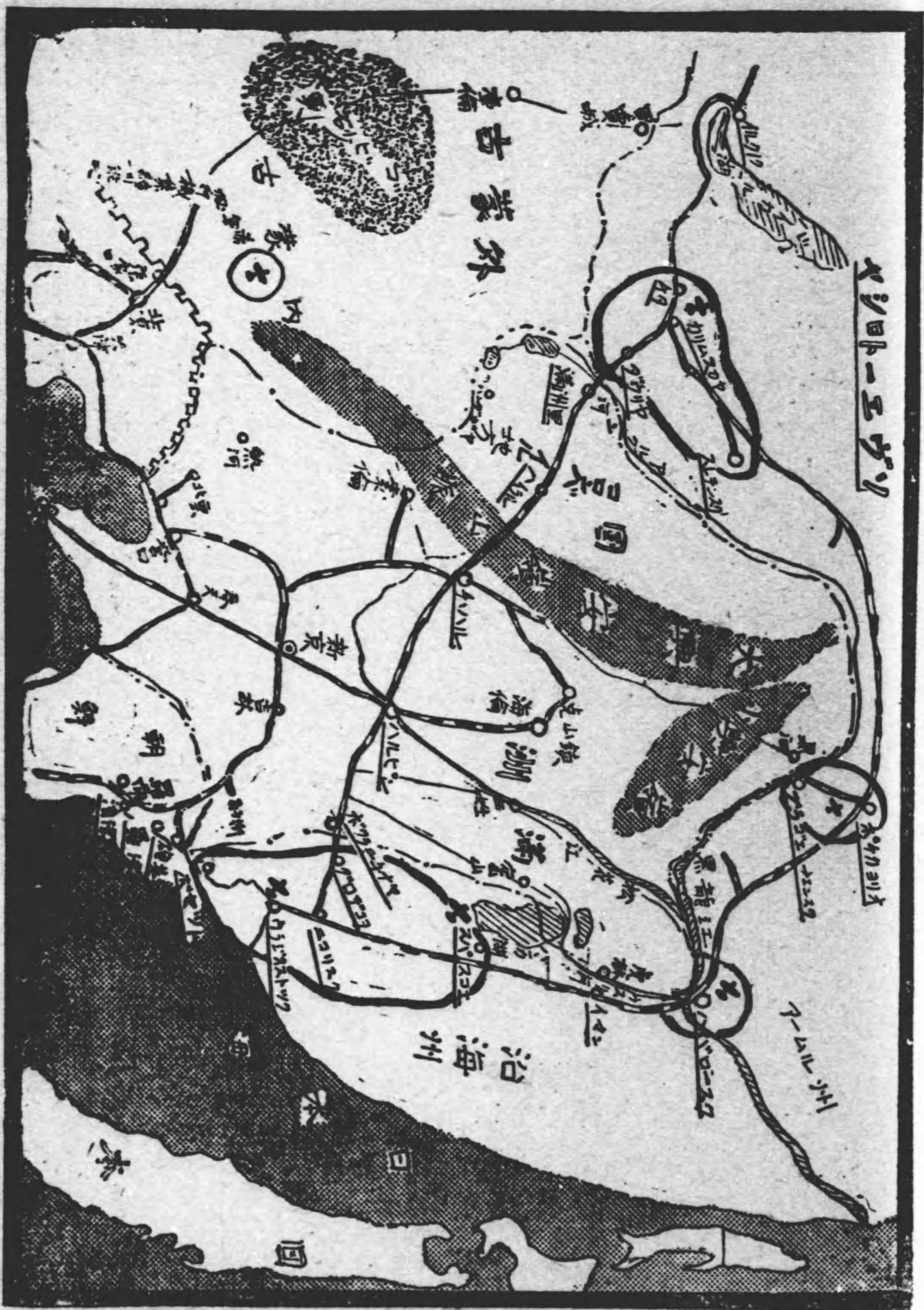
東 部 戦 線

先づ地圖を展いて見ると、蜿蜒九百里の國境線を相接するソ満國の東端の向ふ側は沿海州でウラジオストツクがある。これからシベリヤ鐵道に添ふて少しゆくと、ニコリスクに着く。北滿洲鐵道はこゝから西に岐れてゆく。が、この線に添ふてグロデコラがあり、ソ満國境にはボクラニーチナヤ（滿洲國）がある。この邊は幾重にも永久的な築城が施されてゐる。

ニコリスクから少し北に行くと興凱湖の近くにスパスコエがある。

このスパスコエには歩兵師團の外極東軍第一の有力なレーニン飛行隊があつて、赤軍の誇るA・N・T式超重爆撃機が、いざと云へば滿洲朝鮮は勿論、遠く日本海を越えて、東京始め臺灣を除く内地主要地を襲撃せんとしてゐるのであつて、この超重爆撃機の外百數十機が待機の姿勢にあるのである。

このスパスコエにあるスターリン師團には、東洋人の兵も含まれてゐるとの事である。而して豆滿江を隔て、朝鮮の北部に接するボセツト附近からウラジオ、ニコリスク、グロデコ



極東露領軍備概圖 (太き黒線内は集
中地方を示す)

ヲ、スパスコエを含む地方には少くも三四の師團と、戦車及び砲兵を含む機械化兵團、毒ガスの化學戦隊、ソ軍が自慢する騎兵集團、飛行集團（これはスパスコエの外ウラジオ、ボセツトにもあるものやうである）が命令一下滿鮮の地へ進路せんとしてゐる。

朝鮮の北部には雄基、羅津、清津等の港が日滿兩國をつなぐ新しい近道として、萬一の場合には軍隊や軍需品の輸送連絡地となつて居り、仲々大事な場所である。然るにこの北鮮に近いボセツト方面には空軍、騎兵を含む軍事施設が極秘裡に行はれてゐるのである。

以上の東部戦線で敵の挑戦があれば、先づ空軍の活動となるであらうが、さうなれば我が飛行機は何を於ても敵の空軍根據地を破壊して、禍根を絶つ手段に出なければならぬ。特にソ國側は出来るだけこの地方で攻勢に出て、黒河、コロンバイル方面の我が軍の背後を脅すに相違ないからである。その他海軍と協力して港内を攻撃し、舊式ではあらうが二三の敵砲艦と十數隻の潜水艇が日本海へ暴れ出し、我が輸送線を脅かすことのないやうにしなければならぬ。

これに對して修築されて、面目を一新したルスキー島ロシヤ島その他の陸上の十數箇所の砲臺は

一齋に應戰の火ぶたを切るであらう。

ウラジオは「第二の旅順」としてどの位な守備力を有してゐるか、わからないが、以上のやうな嚴重な、配備を見ると、陸に海に空に壯烈な戦ひが開始される事が想像される。

而して旅順の時になかつた飛行機が彼我入亂れて闘ふであらうし、毒ガス弾が威力を發揮するであらう。又タンクがこのこと暴れ廻ることであらう。かくて幾許かの時日の後、結局は日章旗がウラヂオ街頭に翻るのであるまいか。

北部戦線

ニコリスクから略々直線に、ウスリ河に添ふてイマンを経て北進すると、シペリヤ鐵道が西に折れて西進する曲り角にハバロウスクがある。こゝはウスリー河と黒龍江の兩大河の合流地點で、彼のブリツェル將軍の極東軍司令部がある筈であつて、相當の兵力がこの附近に駐屯して居り、この部隊は松花江を遡り、ハルピン方面へ進出を志すかもしれないが、これは我軍に機先を制せられるであらう。

この松花江とウスリー河との間に突出してゐる。滿洲國のいはゆる三角地帯は、シベリヤ鐵道に添つてゐるので敵襲を蒙る怖れが充分にある。

特に東部の興凱湖近くの密山、ウスリー河を隔て、イマンと對する虎林及び松花江との黑龍江との合流地點あたりはその危険が多い。

この松花江流域の佳木斯附近には、我が武裝移民村が三ヶ所程ある筈である。

なほシベリヤに於ける追撃戦になつた場合は、往年のシベリヤ出兵の時と同様に、赤軍ではバルチサン式戦法で、わが後方攪亂をやるかもしれないし、シベリヤの雪原に慣れた彼等が、楯やスキ一部隊を組織して、奇襲して来るかもしれない。

こゝで我々が熱望してやまないのは、この三角地帯への急行路として北滿鐵道の國境近くの小城子あたりから密山、虎林方面に達する一線と、ハルビン附近から松花江添ひに三姓を経て樺川、富錦、同江方面への一線の鐵道が早く敷設されることである。さうすればこの方面の危険は薄らぐであらう。又現在は旅客機、自動車、松花江を利用する船便が松花江筋方面への交通機關となつて居るが、従前横行してゐた土匪も今は山深く逃げこんでゐるので、その交通は安全になつた。

更にハバロウスク附近には黑龍江艦隊と水上飛行機の根據地がある。

この黑龍江艦隊は砲艦であつて、ソ滿國境を巡る大河を利用して、我が滿洲國の攻防艦隊と何れは決戦を交へるであらう。

ハバロウスクから西方に當る國境地帯、即ち滿洲國にとつては北部戰線にあたり、一時馬占山がゐたので聞えてゐる黒河の對岸、ブラゴウエスチエンスク及びその後方のポチカヨリオウには、黑龍江師團共約三箇師團の外機械化兵團、飛行兵團、騎兵兵團等の兵團が堅固なる陣地に寄つて構へてゐるのである。

これ等はいざと云ふ場合には一氣に河を渡り、小興安嶺を越へて、チ、ハル、ハルビン方面へ進出しやうとするものであるが、これに對して我が軍は必ず神速な應戰振りに出で、敵を一步も近づけないであらうし、あべこべにこの線を突破し、その背後にあるシベリヤ鐵道を遮断して、ハバロスク、沿海州方面を孤立に陥らしむ策に出るであらう。然しこの作戦はソ軍側はこの地方に大部隊がゐるから、相當の困難を極めるであらうと想像される。

なほこゝでも作戦上チ、ハルから嫩江を経て、黒河に達する鐵道の急設が望ましい。

西部戦線

四〇

さて満洲國の西部は、日ソ衝突の際の主戦地と目せられる滿洲里、ダウリヤ邊りのザ、バイカル、コロンバイルを含む廣大な西部戦線である。

而してこの邊りのソ國軍はチタ、イルクーツク、ダウリヤ、ウエルフネ・ウーヂンスク等に歩兵三個師團、騎兵一個師團の外機械化兵團、有力なる飛行兵團があるのである。後續部隊を繰り出すに最も便利であり軍需品の輸送に都合よくシベリヤ鐵道もこれより以西は障害をうける率が少い。滿洲國側のこの地方は大興安嶺の西側のコロンバイル地方で草原、曠野地帯が何百里と続き、ハウル、デルブル、ガンの三つの河川が流れてゐるので三河地方とも云はれる。

氣候は夏季を除く外寒冷であつて、十月から翌年の四月までは地下數尺が凍結する。この地方の住民には赤露を逐はれた白系露人が相當住んで居り、蒙古人、滿洲人も多く住んでゐる。

昭和四年八月の露支事件の際、赤露軍は支那軍を撃破してこの地方へ侵入して、白系露人は勇敢に抵抗を試みたが武器が充分でないため、多數の犠牲者を出した。

何にせよその奪取如何で日ソの勝敗が定まると云はれてゐた、その大事な大興安嶺をはるかに越えて我が軍がコロンバイル地方に進出してゐることは、作戦上非常な強味である。

昭和八年春我が軍は蘇炳文、李杜の軍を追つて、この地方に入つたとき、ソ軍はうろたへて騎兵を繰り出し、我が腹背を衝くやうな準備に出た。

萬一の際ソ軍の作戦を想像するに恐らく、この時と同じくその誇りとする機械化騎兵團の一團はスレーチンスク方面からソ滿國境線であるアルグン河を渡つて、我が右翼を掠め腹背を衝かんとするであらう。又中央からも第一線に進撃して来るのはダウリヤに屯る騎兵集團であらう。

それに續いて戦車を含む主力軍が三河地方の曠野を目指してやつてくるであらうし、毒ガス弾や飛行機が、活躍するであらう事は東部、北部の戦線以上と見るべきである。

更にその勢力下にある外蒙古方面からも、沙漠を越えて南部方面に出て来る部隊があるかもしれなないので南部のハンダガヤ方面も警戒を要する。

ともかく西部戦線こそは滿洲國死活を制する最も重大な戦場となる事は想像に難くない。

砂塵をあげて荒野を猛進して来る敵の騎兵集團に對しては、我が飛行機が、地上すれすれに果敢

なる襲撃を加へるであらうし、敵の機械化兵團に先んじて、我が快速部隊が勇猛神速な活動を示すであらう。

彼我の飛行機は秘術をつくして、壮烈な空中戦を演じ、毒ガスの津波の襲来する中に、人馬共異様なマスクに包まれて相戦ふであらう。荒野の草木をなぎ倒して、縦横にのし歩くタンクが戦場の花形となつて働んであらうし、これに對する特殊な撃退砲がうなりをあげて、戦車の鐵板をはじき飛ばすであらう。

結局彼の鐵血主義が勝つか、我が肉弾主義が勝つか。といふことになるが、我が三千年の歴史に輝く大和民族の一死報國の大信念が彼等をよく壓倒するに至るであらう事を信じたい。

又ソ國は勢力範圍の外蒙古（内蒙古には赤軍の飛行根據豫定地あり）といふを経て、多倫あたりから、我が熱河省方面へ現れるかもしれないが、これに對しても手ぬかりはないであらう。

而して東部、北部、西部の戦線が相呼應して敵をイルツクク以西に撃退した時が第一期戦の終りとなるのではなからうか。若しもこの間、敵軍に於て國內に動搖等の勃發、歐羅巴隣接國との國交の險惡化がなく、引續き抵抗に出でるとすれば戦ひは第二期戦となるわけである。

外國誌に現はれた日露戦争観

以上で、大體終りとする考へてゐたところ、本日の朝日新聞紙上に、會てはレーニンと共にソヴエート聯邦政府の大立物として勢威大いに振つたトロツキーが、（今はスターリン等と意見相容れず外國に居る）米國の有力雜誌「リバーティー」誌上に於いて「日本は自殺するか」と云ふ一文を發表したことが出てゐたので、参考までに次ぎに掲げて、聽くべきものは聽き、辯駁すべきものは辯駁して見る。

尤もこの日本の實狀を無視した文章に對しては、最近感ずるところあり、政友會を脱黨して、舉國一致を叫んでゐる、松岡洋右氏が改めて反駁文を執筆されて「リバーティー」誌に寄稿されるのである。

まづその文章を紹介すると

「一體日本人は戦争には決して負けないといふ荒唐無けいな信念を持つて居る。此信念こそ自國の經濟とその社會状態とに一切關係なく、たゞさう信ずるといふ途方もない考へ方なのだ。

日本の支配階級は昔からうね、ねが過ぎてゐる。さうして彼等は國內的トラブル（困難）は常に攻略的對外問題で譯もなく全部を轉向せしめ得ると考へて居るらしい。最近の例は滿洲國の獨立からその承認といつた事件に求められる。そこでは國際的條約なるものが、嘲笑的に反古にされてしまつた。國際聯盟の調査も遂に物をいはずなかつた。アメリカに彼の重大なる時機に常に經驗する「ウオッチフル・ウエイト」の政策を懂に支持して居る。赤露は大讓歩を以て日本帝國の行動を見守つて來た事により、結論において日本は遂にアジアといはず全世界においていづれの國からも指一本もさへせないといふ事を信じさせる譯だ。

これが彼等の持ついはゆる空想世界である。さてその空想のよつて起るファクトは何であるか。

彼等は四十年前に支那と戦つてこれを破つた。卅年前にはザーのロシアを滿洲から追うた。これ等は動かすべからざる事實だ。だが今にして考へるとそれ等は寧ろ當然過ぎる程の話であつて、かるが故に日本は現代ロシアと戦つて勝ち、他のいづれの一等國と干かを交へても猶勝ち得るといふことは理論において受取り難い。第一に長期戦における經濟作戰に果して成算があり得るか。

どうかもすこぶる疑はしいし、見渡したところ、日本の軍人が近代科學の知識において米露のそのの比較ではない事も勘定の除外ではあり得ないではないか。

第一に日本人の必勝の信念を以て、荒唐無稽の信念と云つてゐるが、これはとんでもない粗忽な見方だ。我國が戦争を開始する時は、東洋の平和及び我が權益が著しく、阻害せられて、我國の存立が危ふくなつた場合に於てのみ、やむなく國運をとして立つのであつて、國民は老幼、婦女子の末に至るまで國家の存亡を意識して、一丸となり火の如き祖國愛に包まれるのだ。随つてその信念が眞劍であり、些かの間隙のないものであることは云ふまでもない。

これは過ぐる弘安の昔、歐亞を席捲せる元の大軍が襲來の際にも現はれ上は皇室より下萬民は云ふに及ばず、宗教家までが熱誠以て護國の信念を溢れ、しかも高野山の僧侶の一團の如きは、矢石の兩飛して爆破する最前線にあつて敢然と、外敵調伏の熱禱を續けること實に百有餘日、しかも凱旋の日にまで及んだのである。宗教家にして既にかくの如し。この報國的信念は數百年を経て今も我が國民の中に、脈々として波うつてゐることを彼に教へてやりたい。

次に「國內的な難事を、攻略的對外問題で、轉向云々」の項であるが、これはそのまゝ鬩斗

をつけてソヴェートロシア國へ返上したい言葉だ。

今ソ國の國內に如何に不平不満が溢れてゐるか。交通の便のよいウクライヤあたりにどうして、夥しい(數百萬とも云はれる)飢餓者や餓死者があつたか。ゲ・ベ・ウの彈壓が如何に物凄いか。そして御大のスターリン氏は、

「五ヶ年計畫の九十四パーセントまでは出來たが、残る六パーセントは日本のために實現することを得なかつた」

と云つてゐる。引合に出される日本こそいゝ迷惑である。これが國內の難事の對外轉換でなくて

なんであらう。彼等は二言目には日本を引合ひに出して、責任の轉嫁を例にしてゐる。

次ぎに「近代科學の知識において日本は米露のその比較ではない」と、恐ろしく勇敢に言切つてゐることだ。

陸戰兵器こそ我國では公表されないので、はつきりしたことは云へないが、いさふたを開けて見て決して他國にヒケを取つてゐるとは思はない。

ソ國が御自慢の飛行機だつて機械化部隊に於てだつて然りだ。

手つ取り早い話が、現代科學の粹と云はれる軍艦の建造についても英米のめつたに頭を下げない連中さへはつきり、

「日本は世界第一だ」と兜をぬいでゐるではないか、他は押して知るべし、科學的にも頭抜けてゐると信ずることは決して自惚れでない、

「要するに現在日本の大戦略プログラムに、唯一の最後の裁きを與へるものは、日本軍部首腦が現代世界一流の陸軍國との戰爭計畫において、果して誤算なきやの點にある。

「日本は決して戰爭にまけない」といふうぬぼれは遂に現實に打つかつてくじかれ、その迷霧は遠からず晴れるであらう。手つとり早い話が、彼等かもつ過去の戰勝の總ては、悲しいかな現代の強國中にその對照を得る何物もなく、彼等のいはゆる勝利なるものは世界中のもつとも時代遅れの代物との對照に過ぎない。

戰勝の相對的評價は一に其事實によるものといふもつともいゝ例がある。昔々の話だが

ザーのロシアは戦へば必ず勝つた。然して彼等は勝利以外の何物をも知らない國民であつた様であつた。この世界最強の大帝國は、もつともよく小學校の書物に描きだされて居た。が、その時既に實際においてはオールドロシアの別な實在が出来あがつて居た。然して當年ロシアがその戦勝の歴史を飾る相手は未開のコーカサス又は内政的に崩れかゝつて居たポーランド、乃至はトルコといつた國々との戦争に過ぎなかつたのだ。

日露戦争後七ヶ年、大々的に改造されたはずのロシア兵も、世界大戰當時僅にオーストリーに對し一朝ドイツ兵と一線に砲火を合はすに至つては、昔に、劣つた非能率的性能を暴露する以外何等新規の事實は發見されなかつた。つまり現代の勝れた軍隊の出現は、何等種族的超自然性の理由や、うぬぼれで出来あがるものでなく、たゞ強ひてそれを求むるなら、それは政治的及び社會的合理性に求むる外ない。

といつて自分はくゝに日本との戦争などただの笑戲事ですむといつた考へ方を強くせしめるた

めにかくいふものでもなければ、又日本を恐れて敢て彼と協調的態度を取らうとする人々に對して、その愚を指摘せんとするものでもない。又ロシアとしても日本に對する政策はその根本において常に平和を希望することにおいて變りはないが、太平洋の平和を確立するためには、一面の手段として日本の神話的うぬぼれを現實に裸體にせねばならぬことも手段として考へられないではない。

帝政時代の露國の軍隊をくさしたのはいゝとして、「現實の手段として日本を裸にする」と力味かへつてゐるところは、たとへ追放の身でも、お里大事に赤軍の實力が強大なりと肩をもつてゐるのは殊勝だ。

「その何れにせよ、アジア及び太平洋の將來を運命づけるものに違ひない事件だが、それ等が長期になればなる程造兵工業と、産業設備と經濟と、教育との關係において優れた方の交戦國が遂に有利な立場に立つてくる。

一體生活標準の低い日本は、結核と他の傳染病との巢だ。これだけでも日本は戦争に大なるハンデキャップがあるだらうし、それは近代科學知識と、社會的組織と、工場能率と共にいざと

いふ場合に決定的作用をする。」

経済的はともかく、教育状態が不良であつたり、生活標準が低くて、結核と他の傳染病の巢だと云つてゐるのは如何にも認識不足だ。

たしか近年の死亡率は良くなつて各國のうち頭の方に近い筈であるし、無筆者もソ國は百人につき、約五六十人に對し我國は二人か三人で格の段差がある筈であつて、南洋あたりの土民と一緒にしてゐるのは恐れ入つた次第である。

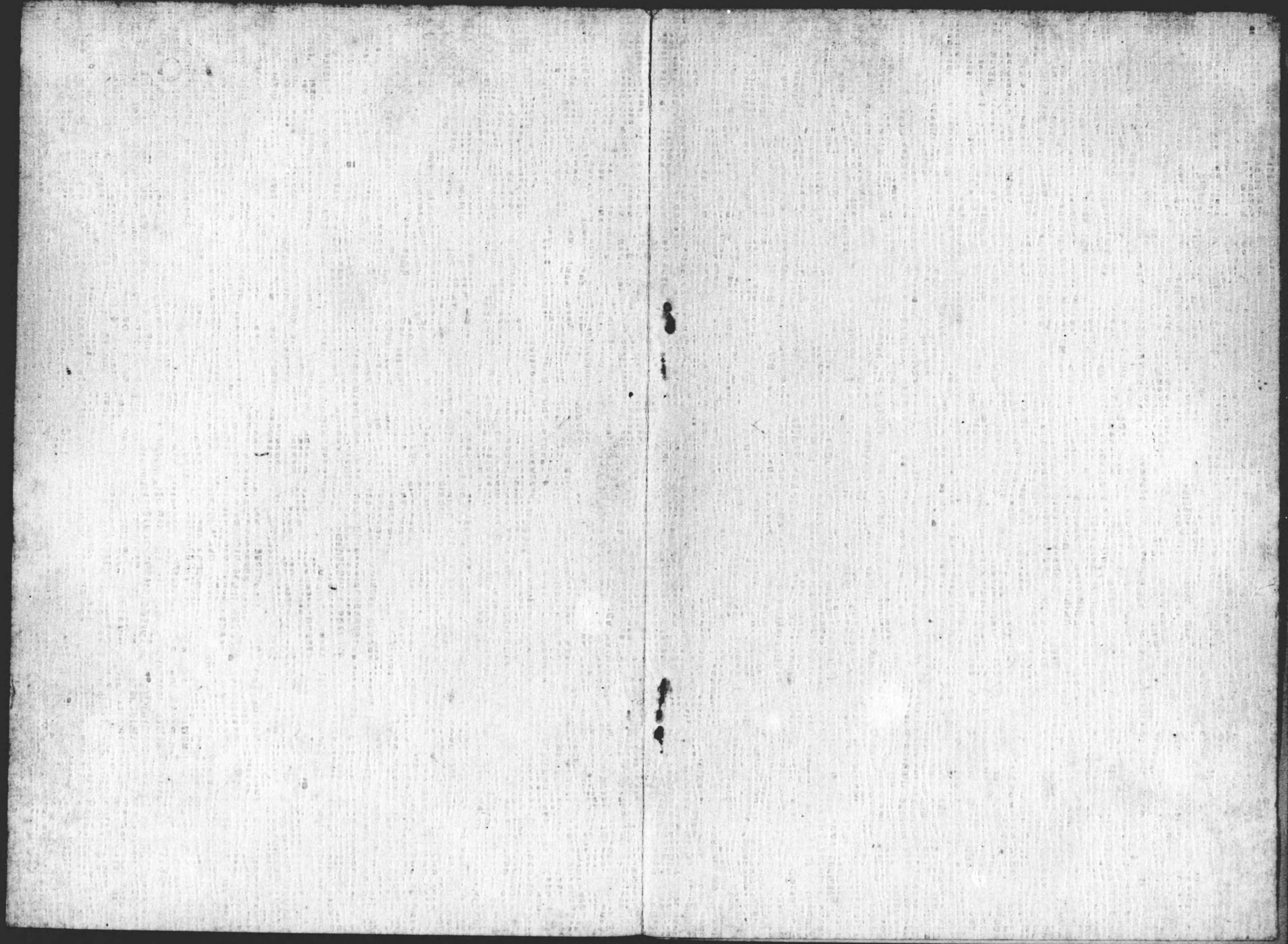
「最後に自分はこの一事だけをメンションして置きたい。

日本はロシア又は米國その他戰爭を豫想し得る何れの假想國に比しても經濟的に貧弱である。

日本の工場は數年間もの戰爭と戰場への必需品を供給するだけの能力に缺けてゐる。

日本の經濟組織は平時においてすら十分の軍隊を支へるべく荷が重過ぎる。日本の軍隊は、近代科學と近代戰術とに基く考察において満足であるとは思へぬ。」

我國が原料物資に乏しい事は、平常顧慮の問題であるが、四年や五年で參るとは思はれないし、友邦滿洲國の健全な發達と鞏固なる海軍力のあり限り、十分に補充し得るものと信ずる。――(終)――



昭和八年十二月廿二日印刷
昭和八年十二月廿五日發行
定價廿五錢

著者 佐藤鐵城

發行兼印刷者 增田好雄

許不製

東京市神田區神保町二ノ廿八番地

發行所 知識と修養會

東京市神田區仲猿樂町十七番地

發賣所 大光館書店

電話九段一三三六番
編替東京七四六七五番

大阪市浪速區惠須町二丁目五十番地

關西發賣所 大阪圖書株式會社

電話戎八六七番
編替大阪四二七七〇番